へ遠13
1902

新噺始

夫天地に陰陽の二気あり人に賢愚の科あり巧者不功者あり[illegible]

[illegible]

13 1902

墨ぐるまよりあそびは下手も上手の
乱れしも様に衛がまりぬ種
ちりぬるは絵に鳥も空すかるの絵
ざまし筆桜木に版費して人の
なまゆれなど綴りまた厩本となりぬ
趣は数ある草の〓稿おやまさこ
意うしむ新しき〓紫〓
〓は勝りあらし様が龍の

都くしまの人なん一〓ちらの
趣向しるす新〓に遠〓したる題
しゝて綴り小冊を見ずつる筆
させられ吉いおう浮世あり者浮
〓ちう新しき〓まじ器小あるべしと
極楽の〓の浮名も〓かまいて
形ちらしき〓の評判押ぬぐひ〓
寛政丑のはる 〓〓〓〓〓

飛ゝ紙鳶の初春に産聲をあげてより梁て
芸者古士に浮花卿は新に慕しき
小の服のりの路の事考を諸君子
がくて深ふ御覧の目貫は長く久
しの事までの帯の爾

酔月山人戯に叙

自叙

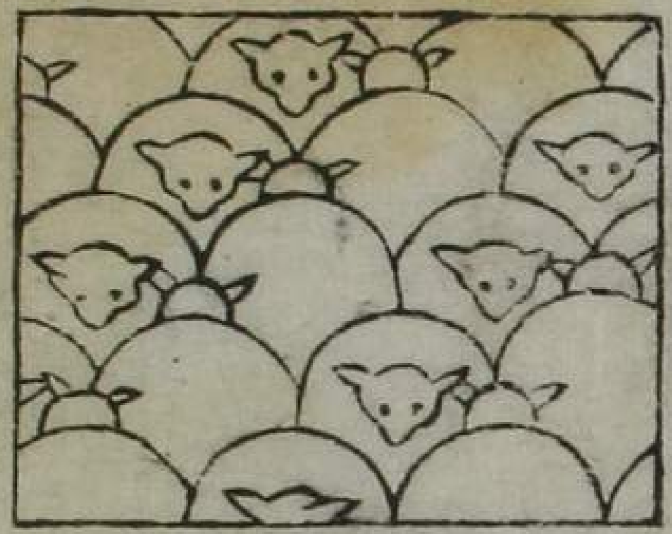
小紋新法は曰京橋の北に住は天文を見て
小路を常とし三ヶ所の紙を繰く業は天
下の形も印すを支配すりまて下手に
横理の川倒に深ゑ乃馬の手
綱かりし死にの川入言の道る
さらに論もまきな八蝶して業の人
其馬の爪の湯の世の今の足の人と

せしが忽然として光明来りて「名家」
われ家は飯乃姿の絵をもて御下の頭巾
付けしが「あし」と見ゆるものと世まこのむしと記
これより學よたてて、物のしるし、生涯
曲る耳をもて人の金言の止了人の慣習
人のとくもしき扉て書扉に二十坊の
息も我ながら成程と一通りの学者も扉白
けて一言の耳にも残り一通りの細

伸る稲木にはあらぬ筆の行の打までもきれいにたへじ
付打済手利く風さへ向きよくあしく彩
これ迄さんざん悪事を致せども我を請けれ
ますます田中の身となるや先生の我ま
いの行き山師の精気をひとより出す乃ちまれ
今人合て役者の心神体の趣向に勤合
方便て頼まれ破るる酒戒ことさら我の
殺生までも致すといふ人の事　儒仏

神ぶつ川藺のまへにゆるしもとまるしハ格ひ
ら舞の意貫（くざ）辞を借りてあらかし
舞もじ合悔（むね）儒あれども理ぞなき
なるをおのこ辞（じ）のくもならぬや格とハいふ
義の年恨（うらめ）しくてそ棒白羅文字ばかりを
又しらずかたりにゆやきたなき（ヤツサコラサ）ちやくの題おこしまもりて
扇線ぬかうし新始

四方山酒楽亭



未のとし

うのとし

尾も出し加らもふぶつてこんをまぢるくあいちい出つさ

やくいさまいでてらんをおかくびききまつるよたまれるとうもち

丑子のとし

辰巳のとし

せいかぎりんハおかうさうの白ひらくてハまいりねらの人のまんどもうしへきまの

組のさうこわまそうむうつをであろってぞろふとまいをしてさ孫アイそうでまうさうのるのさ

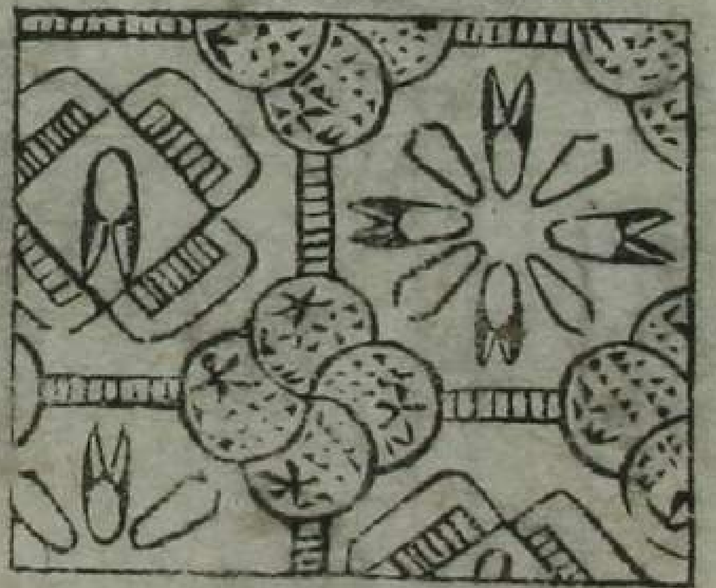
午かしこ

伯楽とのくいを
ろーまやナうら宿
のていーゆら駐柱
まーをごアしを
ろーがあれもきん
ろんさ分のいなきさ
たんべエるア

申酉戌のうこ

ゑゝきゝせぬても
みるんざうしくを
ひつるてさ
ぶくりや
おまけの
まんぶ
ろう

ひつじのうこ

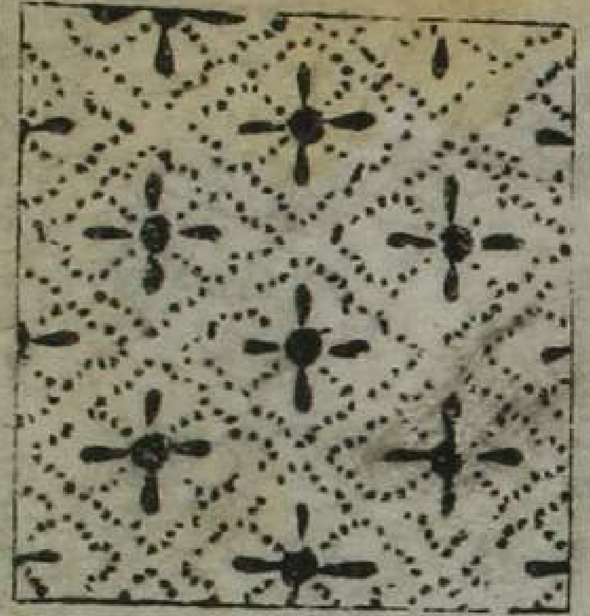


こんどのひで
わーかまかる
らのえもちう
ぞーひでハな
いきのふも色
らら内へて白
まわってへさ
どふてもてらう
ちのわうハ
くらんさ

麦のうこ

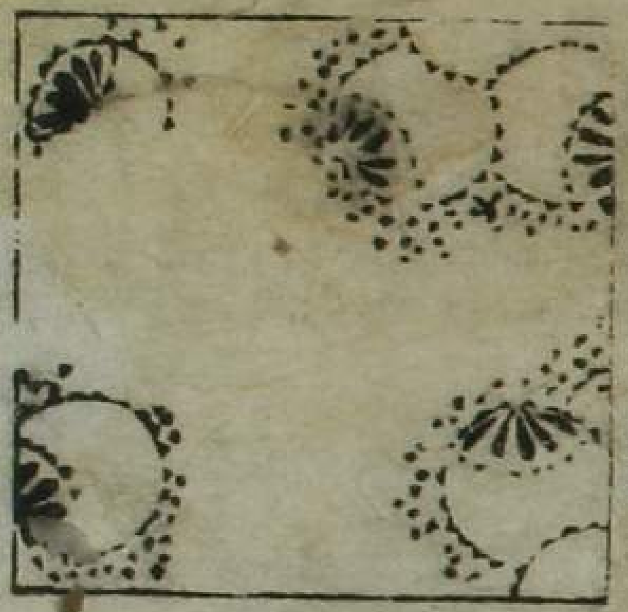
ちくの守
つゝいかう
つまで与り
一人分をそく
できいろ
おそろうで
すいろうと
いなだし
ツし
くやく

かのこの紅し



しぶれの
くらほひ
おもしろく
きれいな
かくさう

きのかうしま

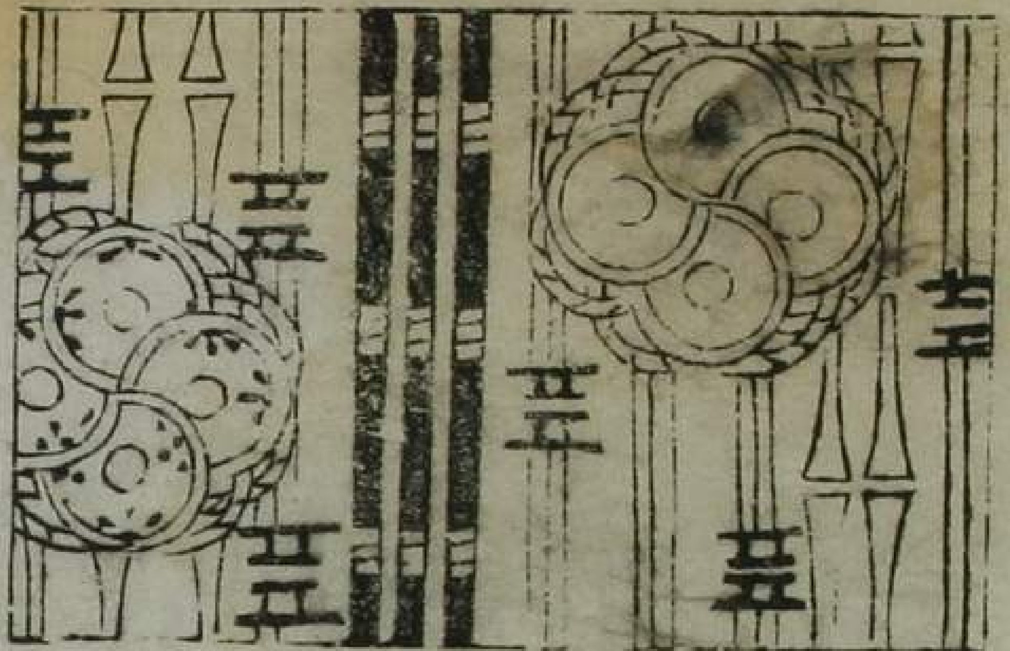


江戸さ
のせん生
きっちう
てまで
きれいな
かくさう

常盤津うこ

近中の月えに
居ひをとよんさ
よくろゝとつや
中門だてまい
たもがざーして
まび忍ゝるめん
ざうえなぢやア
祭エなんある
どこでよんざ
どきう丁でえ
ぶんぐきて つけ
ちのんど

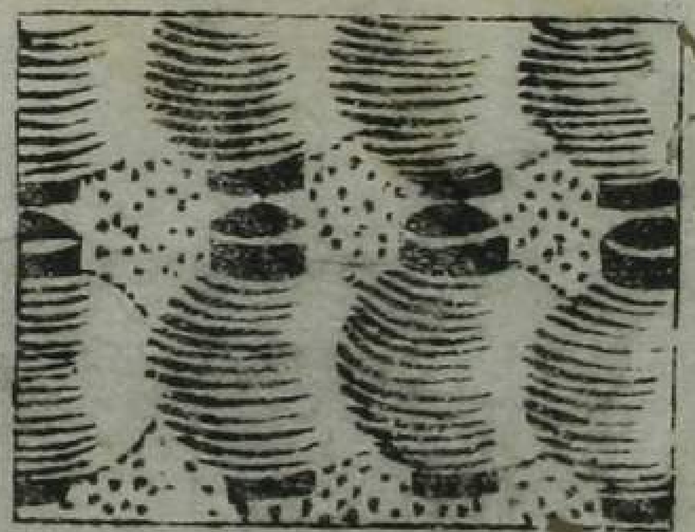
冨本かうこ



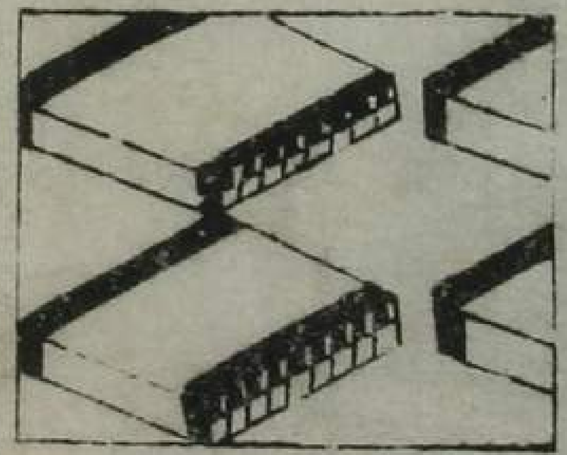
ちや一かさ

三筆せんけいこのおとくをおまへ[illegible]
うござい[illegible]お上手とあそび[illegible]
ひけおやのむすめはいくちぐ
まんびてろう[illegible]
なまずぜて[illegible]

むらけ[illegible]
らげい
きやに
[illegible]な



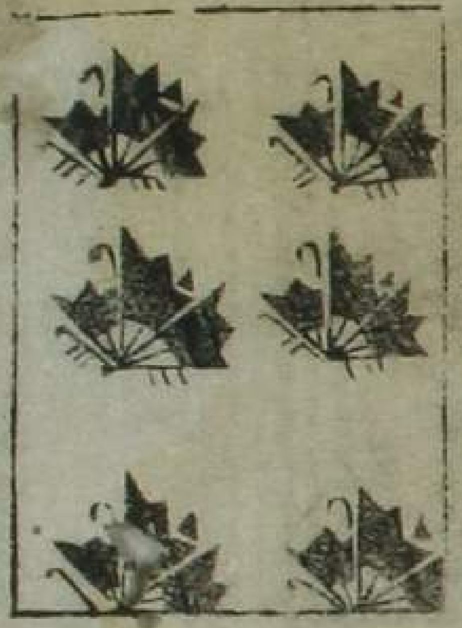
ちや屋どうえ



くんでう

ちりめんにのこ[illegible]
ござり[illegible]
の[illegible]
代[illegible]
[illegible]
[illegible]のかぎり
にあります

たゞみにたとへて芝居
ちん[illegible]
ちんで[illegible]
ばさ[illegible]目を
くで[illegible]
[illegible]
[illegible]



瀬川もとん

一名菊[illegible]れ
[illegible]れ
の[illegible]

松五小もん

[illegible]に
[illegible]
のりくのめれ

芝居てまふろ

芝居仕立[illegible]
とかだ[illegible]ち
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
作者の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]芝居
[illegible]

のしめうら

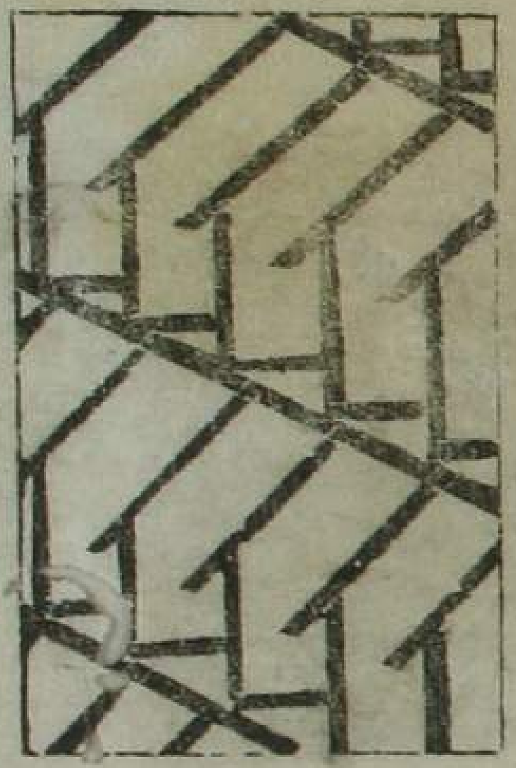
江戸ちりめん
[illegible]

にさかしき

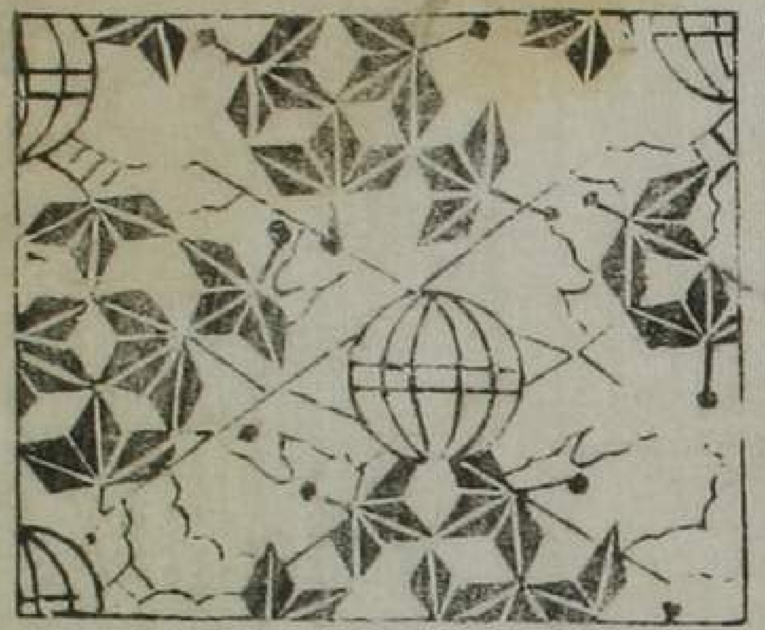
広川のひかき
いたもとして
ありまくの
くんぱりよ
あらず

いまつとのふてく
ゑらそてやそやつてく
とらりておかく
つちやアよっおかたりん
このあつちやア[illegible]
やちやのえんとつけ
このだ
つっかとろうしく
うまいのんさ
そうで江戸の
おへわへ芝居
たまあうしよう
嫁きこと
いろつる

なんてる月の姫

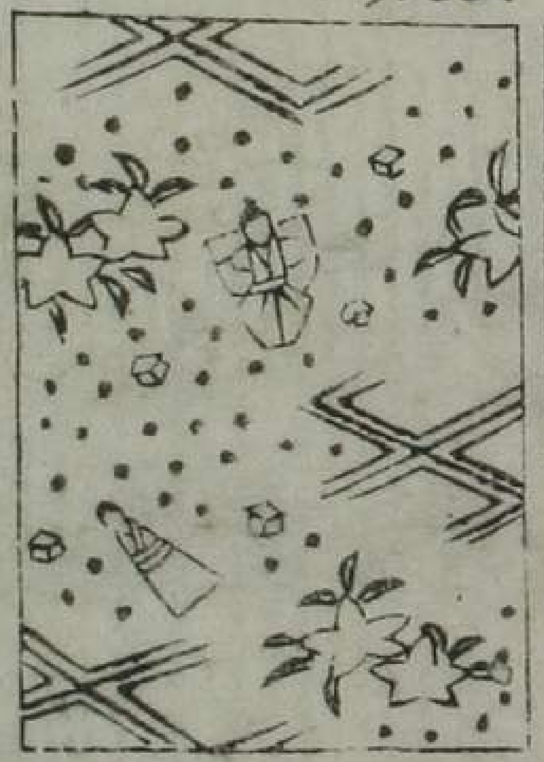


絵るかき絣



とのれかしきぬ
[illegible]

ひいなまつり



うのそ小もん

おん子のころそ
れ三月の
くれいのひの
そのうろり
又月へかね
かろう

月たつず出たん[illegible]
[illegible]

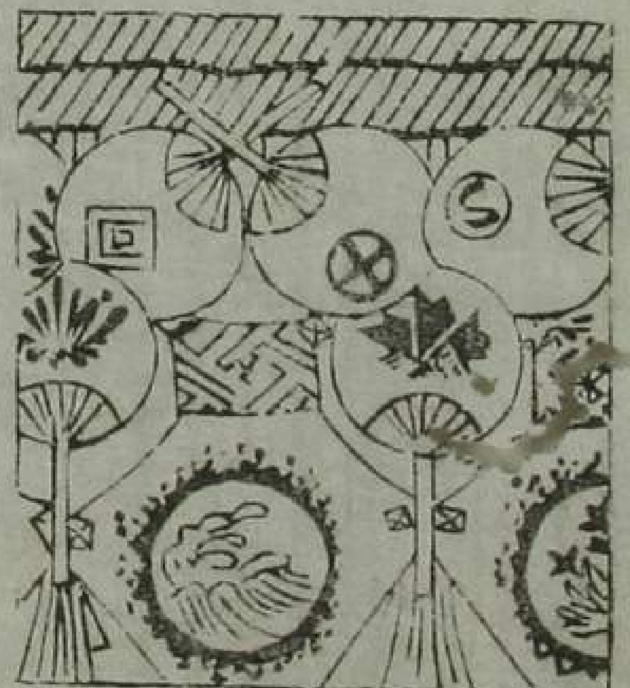
ちまきかうし

ちまきの
あしでかし
こもちを
さしうらみ
にうらみけ
へたるさ
ゞ

がきくらしじま

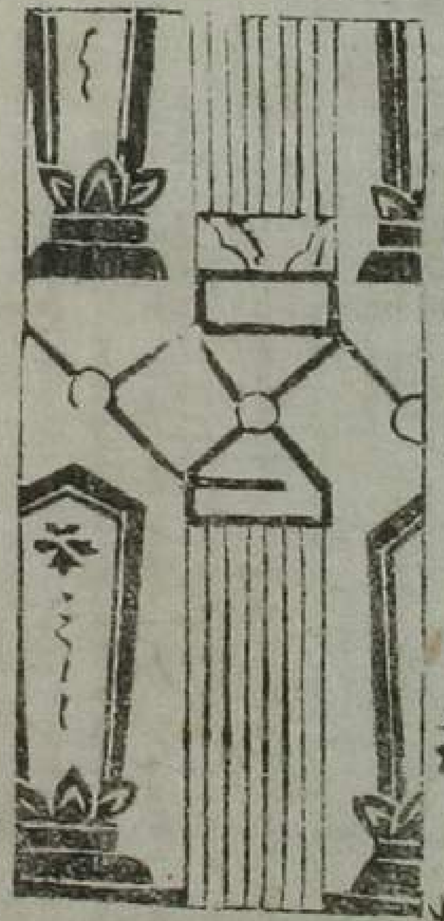
きすかめくれにほとかくられく
そこでかくらうしてなすゝねとこ
とまりいますゑうふたもにきつ
のさまゑはれにはとつけら
れかしこれしてたてさうきた

天王まつり



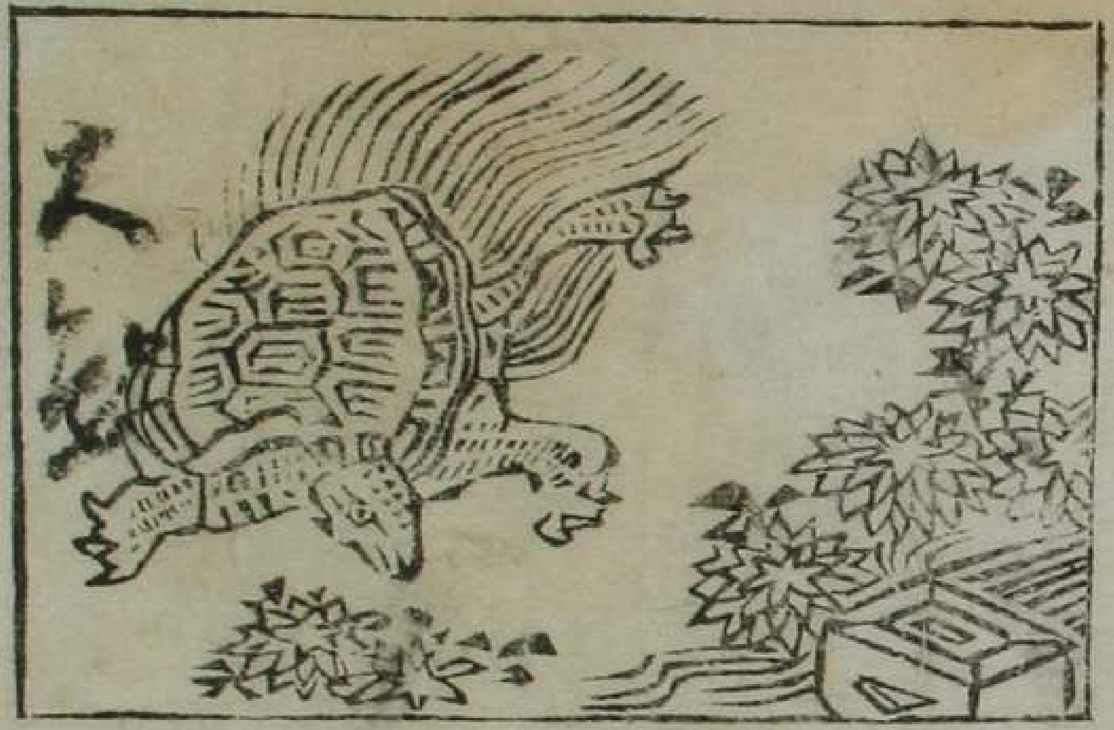
せうらいふくと
まりてまさ人
くるかいしを
の幸ものこる
いかくかとと
のとまたあひ
とりかいいかり
に新大念のの
すゝむちまと
くらことゝとて
都しうら[illegible]
かくてんかゝ
むしかし
てん
王まい

ぞうりかつるき



ぐくとかさたてかくなとたまわり
まつりをめくりまでおひなこの
あらきもつかみれつらうしく

きくかさね



月見の花

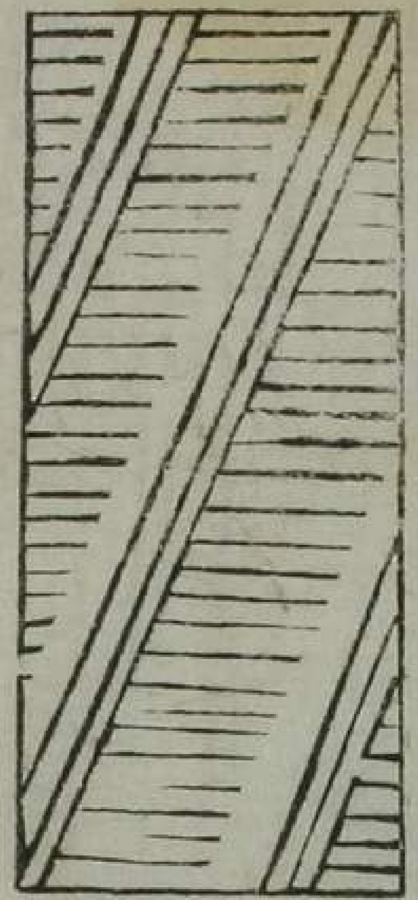
深きさみしのやの月と謡れぬ
秋のことなりハさしうたきうて
ねらてとさ
たらうさ
しもとう
やしやう
これておひ月
見もできさ

忍ひすがしき

たにの流れ永遠あるふた名の名とところ
あそびたの顔をきくの酒亀もちてたいの
おとこ上戸もつやうれちやい
せてたいの
つくなりて
おもいのを
かさたいを
まけてき
る[illegible]

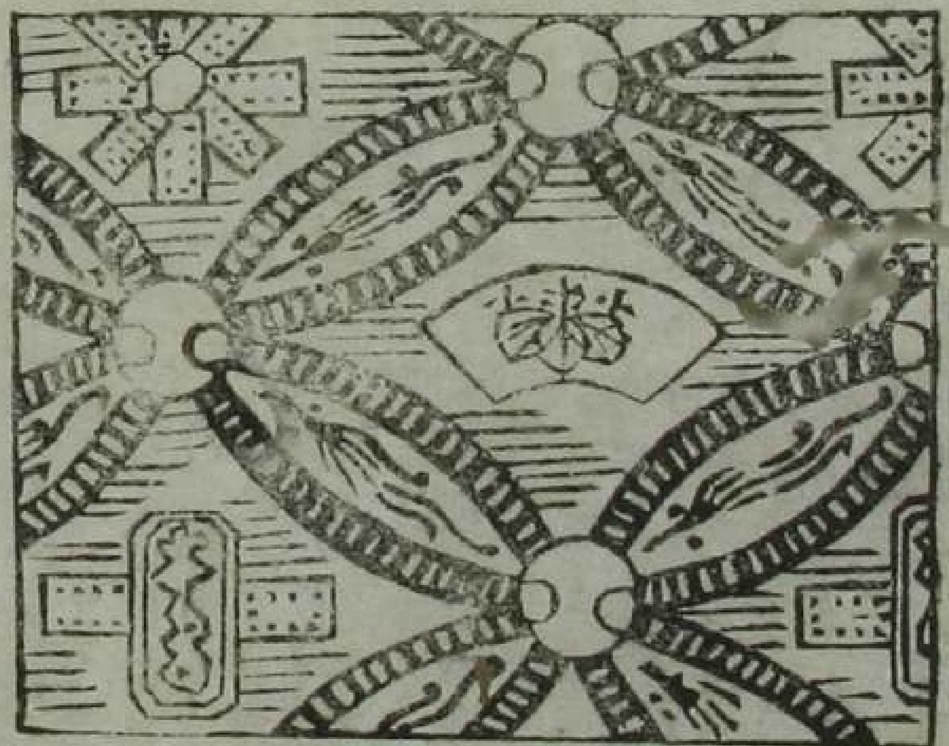
はこさくかう

いし頭巾さん



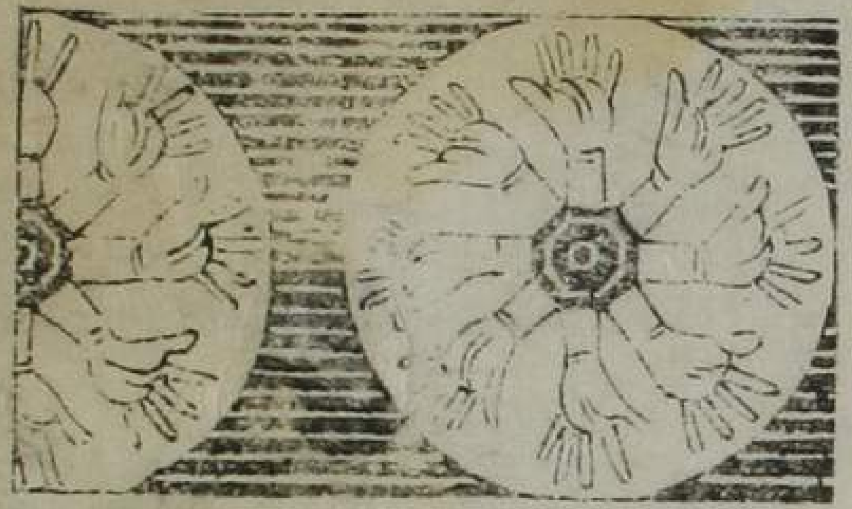
はこ子茂らう、
ますりくごき
もんらく衣を
ささ衣もろの
若衣筆をきき
のめでささき
をもしかなり

宝むすび



とのまくらくに八会銀を
くびえぎんものこさず
きものかね排らなり

わ手くるま

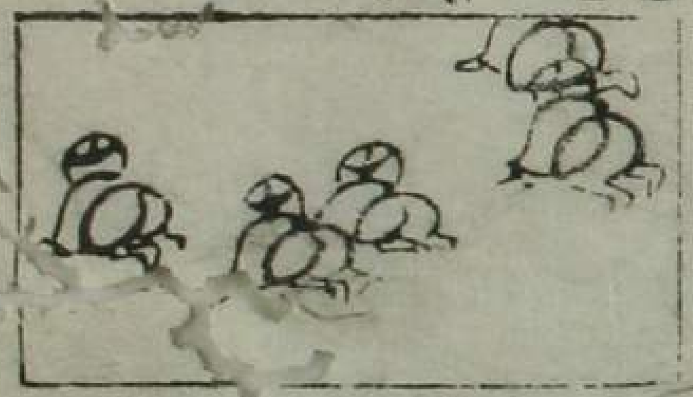


一名おてくさんの
てんぐうま
手のないぬ部の
のあうけなさの
ゆりてきてもようり
ゆりてのうちよむらかして
てらんなきといへぬあはくよむらかして
きく入とのなくにちょうなのきもろ人の
いるかうらくよなまいりやもつりくね
ねむうりまちてもつもいて
トいなのほどかりて
ふちくかをかく

とふゑり茶

一名ひろりそう はつ八ツ書ゑけ ようはらく
くんや仏かもしきれくのもまり
さんやへをかりのをとおつく社
もきさたけのおつゆりつくけ
をおしさよかと
さまし兵くと
下顔くろう
かなはくち
だうなわけを
おくらおくる
しくのよ
あかくら

かうのおいど

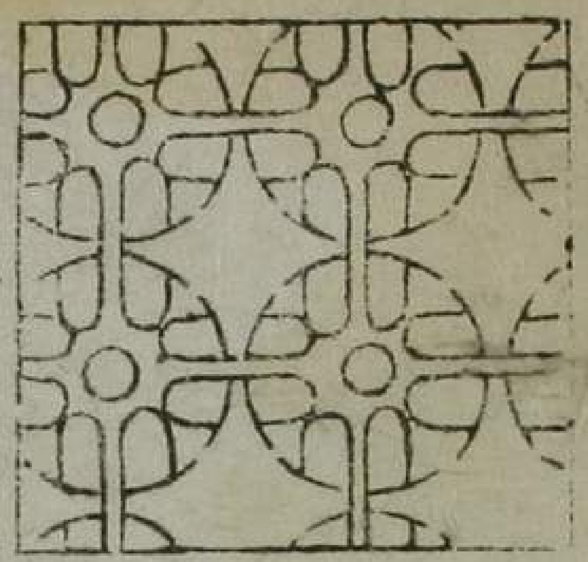


うそのたいぶのまさ公人
きを葉いはともせで
きくぬとそろへまん
ずりきりやくへ
もひてきをせる尻
をまはかうてらるまは
おやまる
つくさへぞり
ますくおいしかな

ゆめちうらん

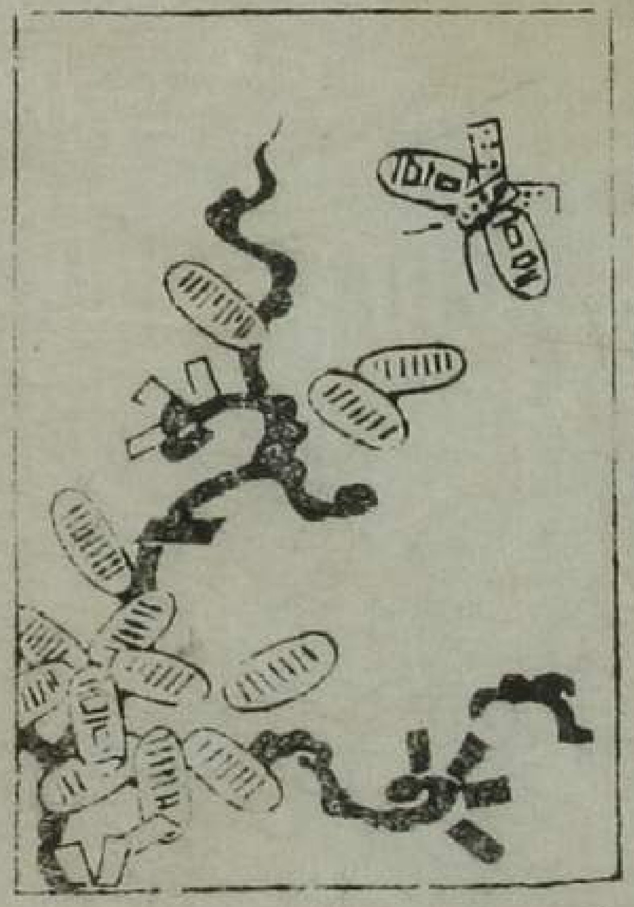
ゆめんうりあうたまくらしま枕や
若衆うゆめ女らくの初花のねみに
そうしろ才蔵まいさもちくてとうもり
のさうゆめ
ゆめくるとうふてしたうれ

冂合小もん



からちとむかしとうり
さいといふたえのおだん
ごをこへむたうまさおれ
かむもののやけるくさき
ひろいとくうそでなで
きる衣ぐ

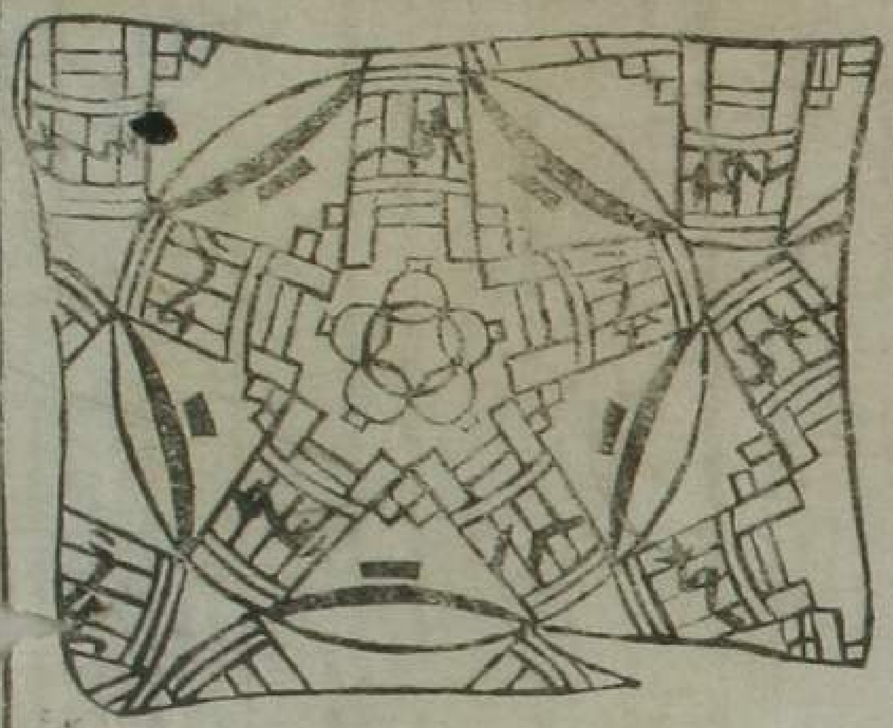
大らく てく



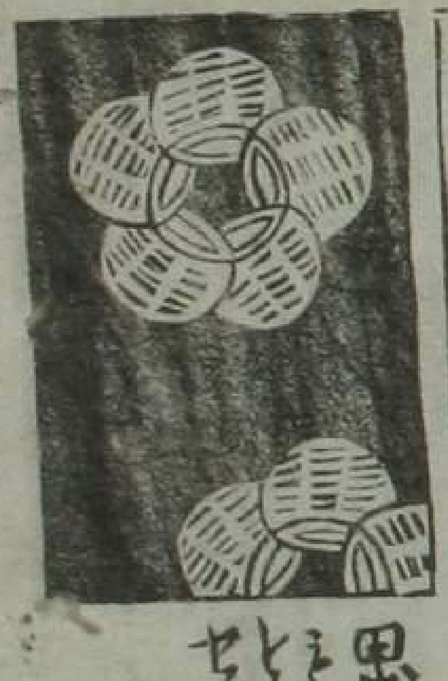
ちるとむてうしお
ところけともえしく
あうずたうれは迷
やきめくふみてう
合の林のちるを
そいてそぞ訓読
人まひふちつきへ
までとんさぶんじ
さんてよいやうやよ
あゆをてうしかしも
わうしおうしといふもを取きんとつ
組光のつうぶてうまくとどうのみと
くみハテ以下金目でうりそてる

ゐやのかり

ひろくとりても皆ゐやの
まわるゐやのたえもをもえを
皆てはくふるおえせを
たきさするのさ
まぶことさくさいだされと
りゆうれいへ人あしゐを
きいのおかね
そでとまきもの
そなん人あうれず



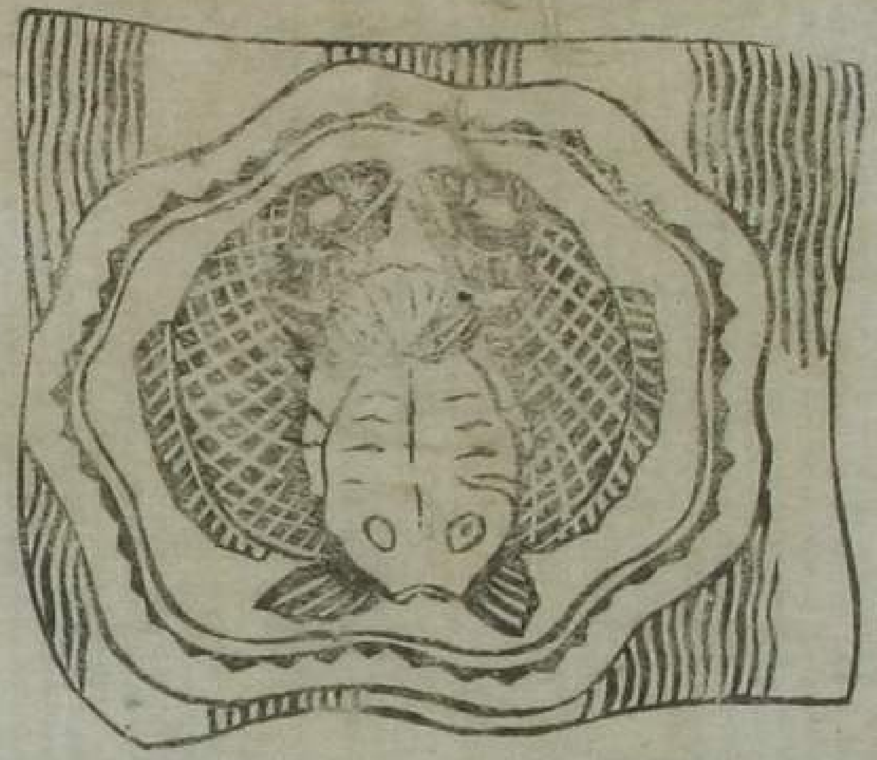
ひさごもやう



果地もござる合もかたる茶
ところる女あうもこまる子
ともこきるうれまあい
せてみまるしおやとめ

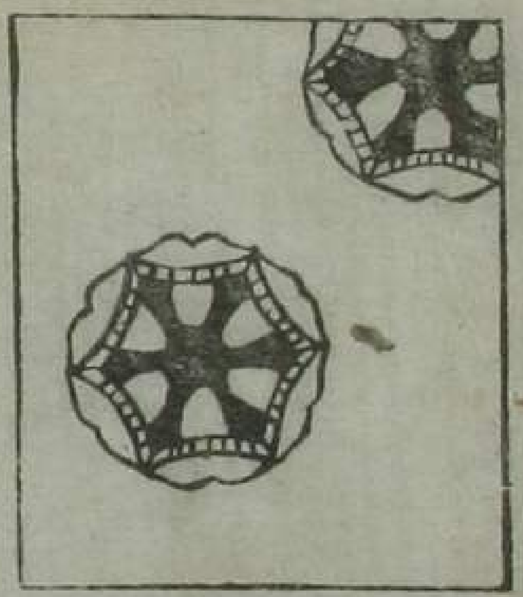
ちんどくてあろう
とんざ漢字の衣
かまわれともいう
てえるれいろと
とくアのてこと
みてちろうりくん
とくはものみらな
ほいにうれるぞ
アひやたくと
茶をちろうかん
しろく

千鳥まがひたら



ひだりくさのちぢみからニ二三本ゐ
のんさとよろしくこぎの頃
とのくれてひとつ　わかり
ますとうのへさらつきみさん
すいのんじごさるさし
まいしたしで文一ツの文
売きーにられぞ
イエ

はぐるま

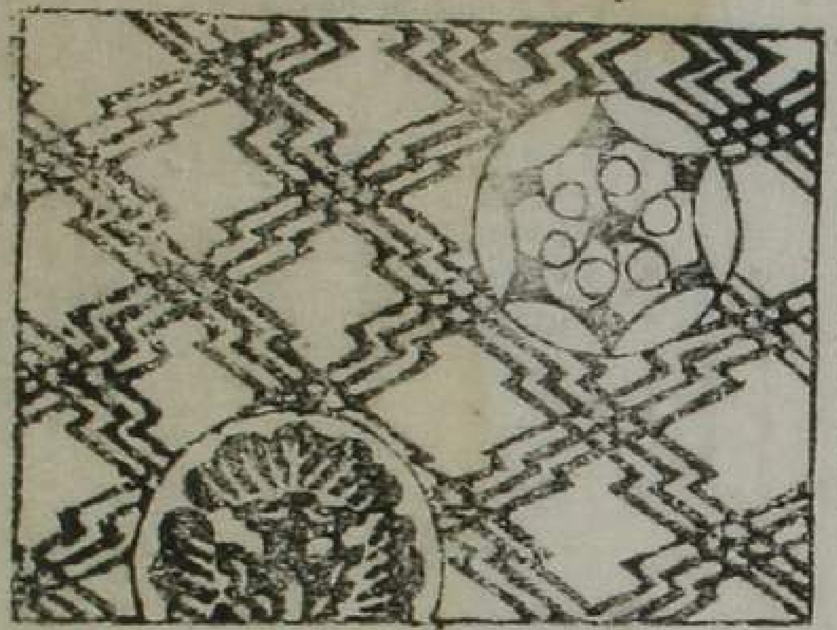


ちどりがくし

はやりぎらひのかくもいをさかひ
の形ちりこ寸の竹を以み尺の
しくことゝろ古天のかくさを
ろうて見せ中ちは車にのせ
らまとちくのまうしね不とに
沼とのこ中の字のまさ竹
ちさらかへの用つまゝね
根らね

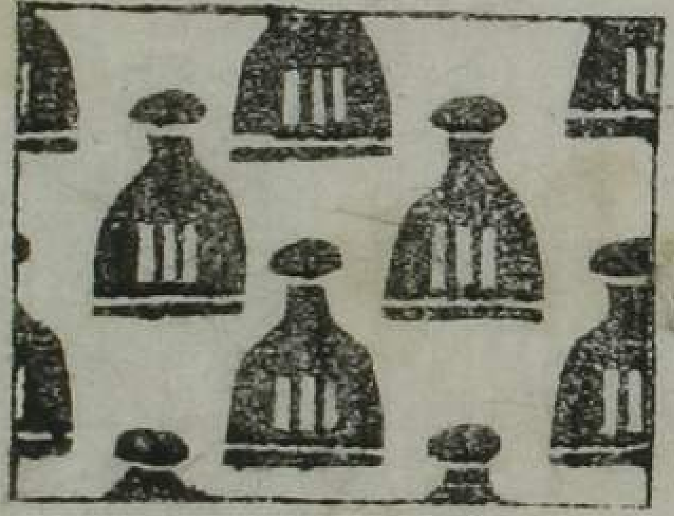
きらら南蛮のちぢみの
ぬれすらさいのそち
かしーとてさひもきら
ねときれぞろの中ぐ
えめくらちよく　から
まるのうちうにつける
くまそりらないへくと
ころ　こたち
らこと　くぞそれすれ
くーしときまさびるかせと
いふにめくら　なへ
せける

さらまり川色

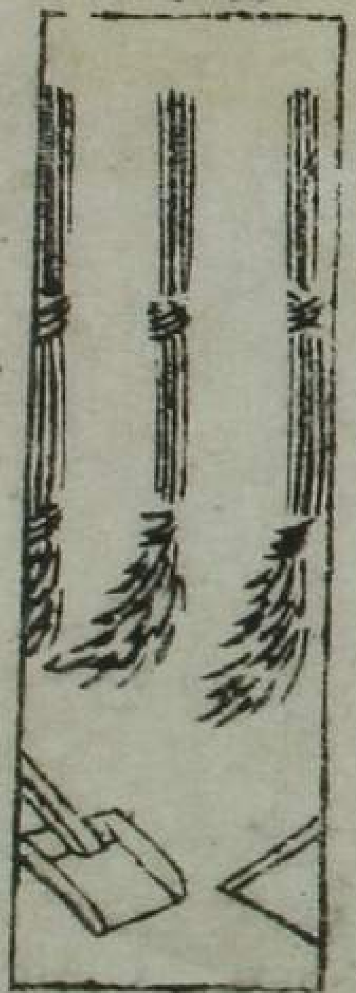


結城さのちぢみの色ふさの
きれならさ形色りの色
ところかんの人まの口とま
いろしゝをほこうへあれ
をるいたるさかり

こはくろうんと

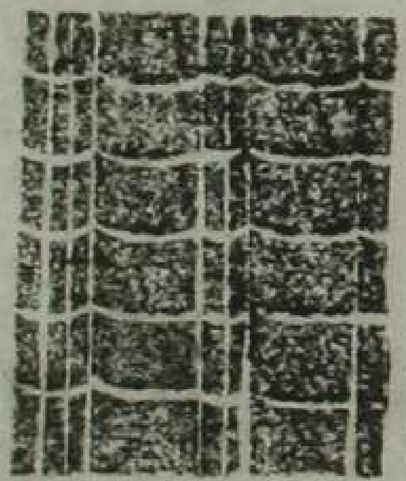


ほうしちや小もん



茂りもろハしやれもでハ
こ川ほとおうこいきん
とせ五

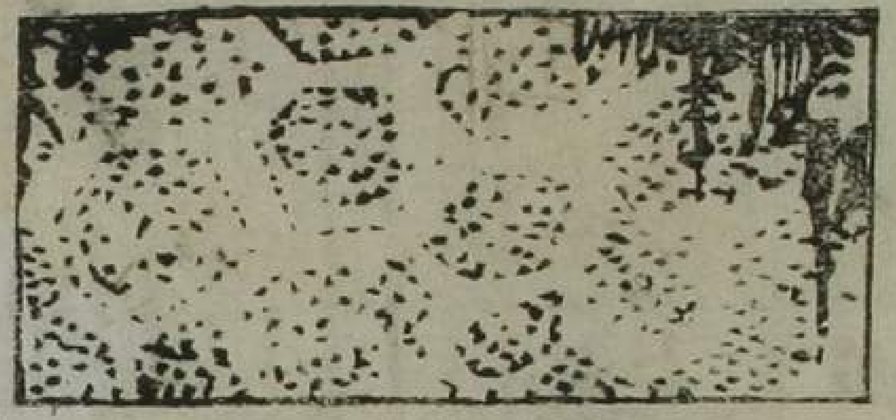
かのこしほり



紅しろかん
らう川き
わけままさ
ぶみくさの
きれたり

そろじきんに
ちやにそろ
てほのじ
ぼろくそ
ろうさぜに
て
まるひろ
き

高石そめ

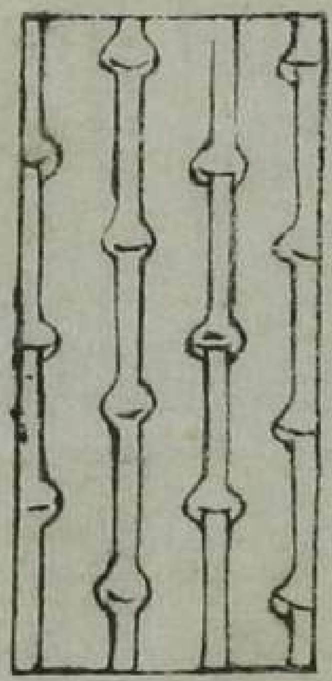


かすり石橋へ一丸んを
あつけ人ハい
太きちくとだち
いーさくをふさ
たしつくさとし
たうらなのんは
いきあひてある
さいことをちら
もちつ
そふ一ど

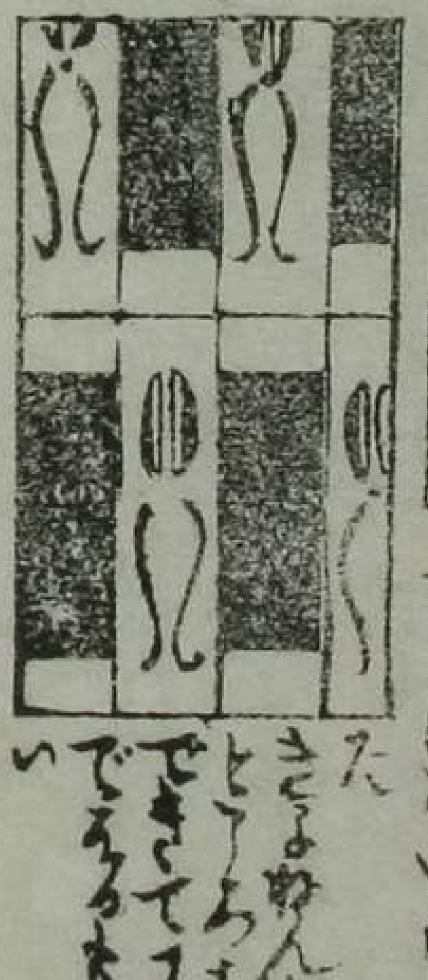
とおも石たふ
たんかのんで
ふめてかかる
まとらたろ
そのり

さゝけしぼり

たゝけやまち



よこゆうつるき



今のむすめハまよはかゆのお
つうらくさいアれ人
の気色まさとかし
るをさして力のかう
は針ぶーさきまるが
ぬをかけてそんいか
ぶうとかけてかる
てうくにまるいのふらできた
きてよめんうきえん
とつよわきれ
できて又かかし
でるるきいそとし
い

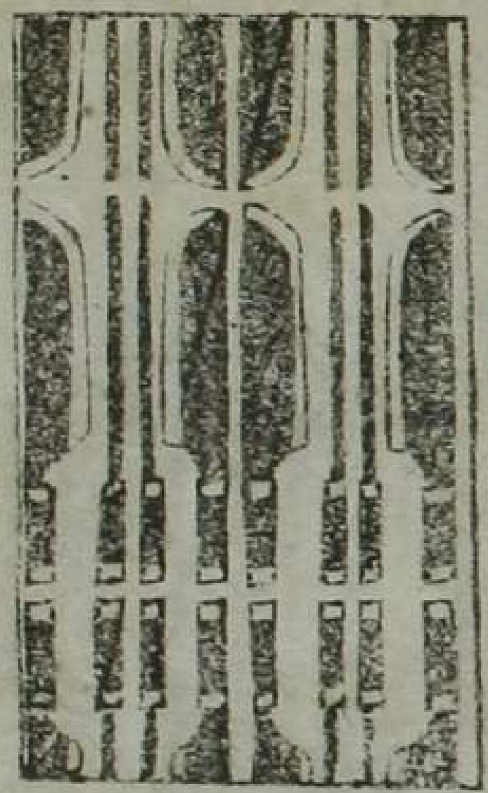
今あくまとくるのしたとき
かくしさ ころのきりも
つましれ表あり一大せい

流寳かくし

おうろしく
つけのらゝん
まえゝおとと
きくくれ氏
くをとめのし
とさとい入わる
とりがいまる
かなちーすの
てうをが
かさふか一り

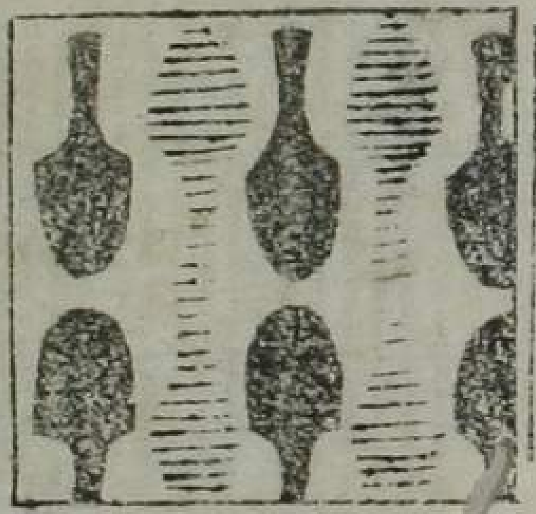
あつそさかあくを
三日まとけあく

まろうりかくし



かゝくちだかのれくと江けるお
のみゆやまのたや八目をさく
ぬさてのもろ木すがまきる
でありゆぞにしめとまみの子一まん

あつしちやうしき

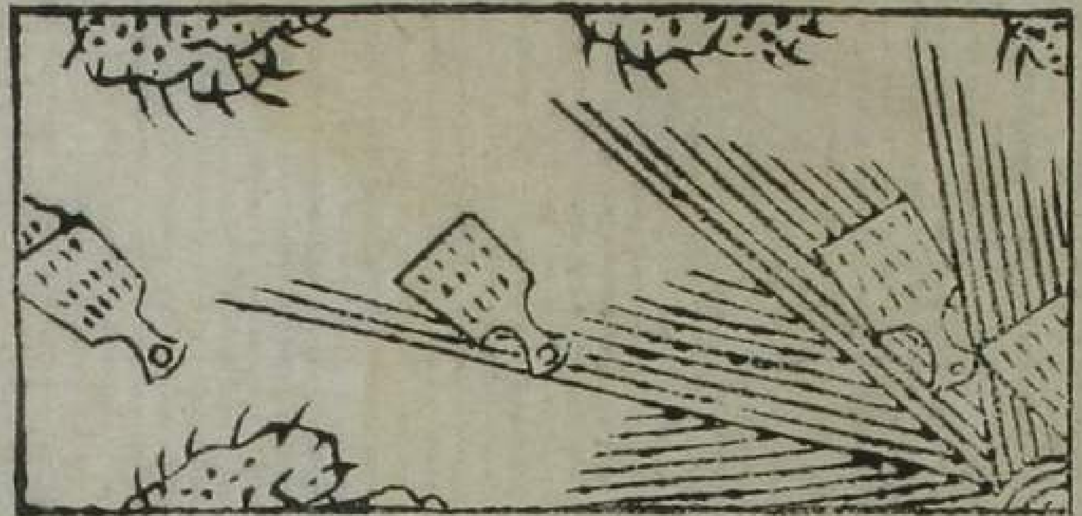


縦のおもりまるの
うち人たさらたら
くらひをたつと
あとのまく気もに
めいしてくるへのみしの
たものをするように
これをいそがすむ
ふのくからかる
ひとえんのあす
味アしひにつこ
知らんに
うのらく

梅花人の内のれんないと
るるにおまくへの子とも
をおもくちにあるる
かうらんぞくにおるで

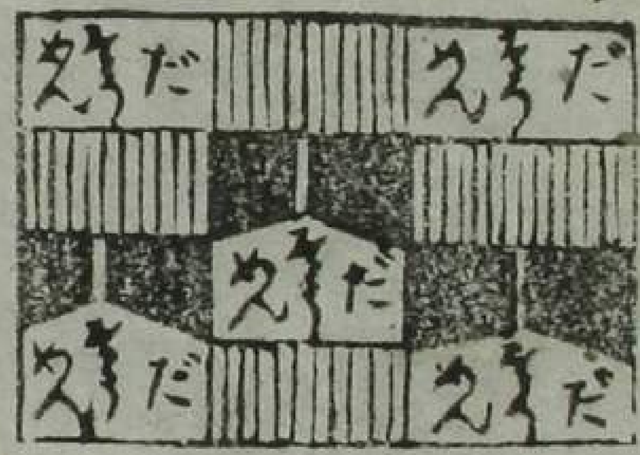
吉田

ぞうしがうし



山のゐすけ見とどろくとろふみすり陌のおおやく玉倉坂の妻のしらかろうしなうつくともつ夕谷つからさ子の妻めふとるてかさいおまくらおんとういけてくらいゝむツレおしわところもちろくもまゝしがまきさぎ

だきめん



だきめん大ぎうりとつふう引れとるそてよめやと加何て見れとろうにくちもとくれそへまくしれぜんこおのていねかしそらゝれぬかれぎ

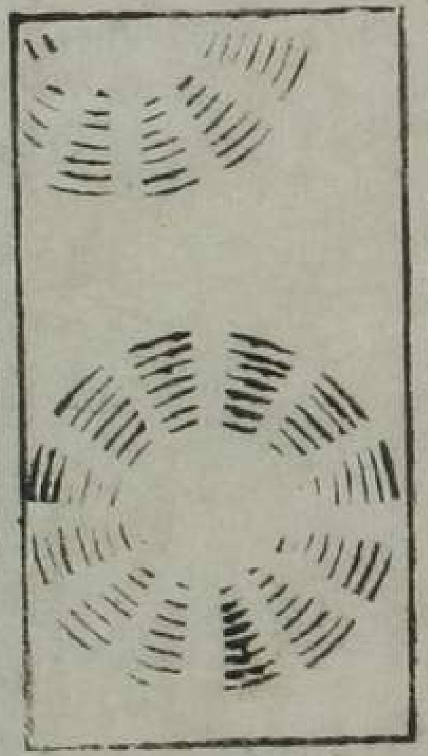
蛤志ぼり

さゆずう志ぼりいむこきを志ぼりのかしさ

のゝ字ちらし

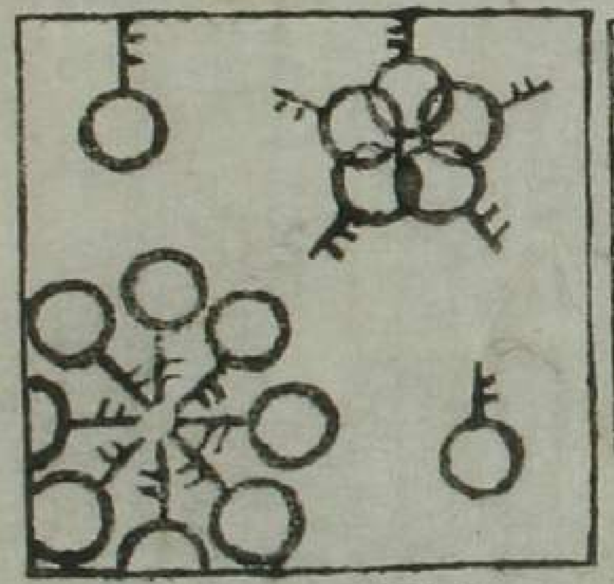
あのおむこんのきこえのきれをのかしての名るとくこゝやへの作とめくろんぞやるし小のたくかしこの字けとを包しふくさの如く

笠志ぼり



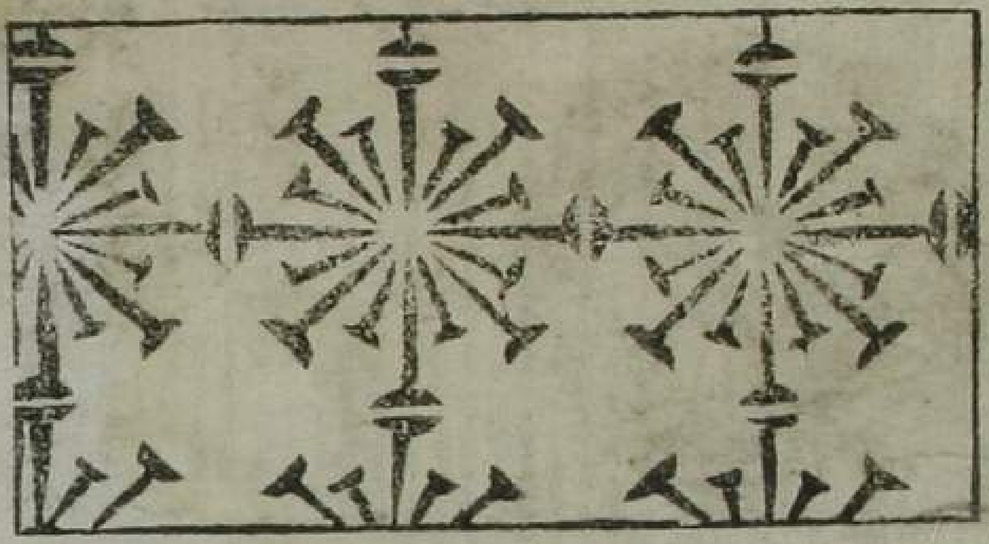
やぶひのおそおそ行作さ古司ってまいにぞ在さそ志う人にゆあつひととるわておがくとるかしかけられたいゝる志ておつひをとしられなしきやのおやちかなんきおゆひつざきうらぶしんぶぞるま志やう

かなさきしぼり



むまとにかざをそろさまんとなやぶのうこぶろうものたうのんにかけていゑしぬさ

新つるぎさ



そんうちまでのかく
ふいよくきくいうぐ絲

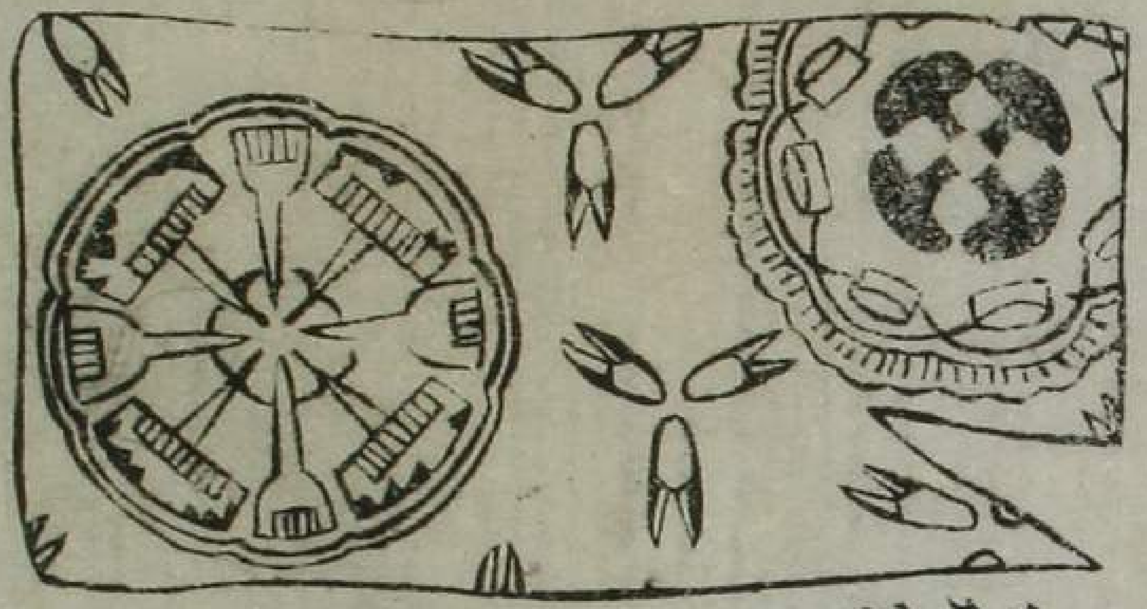
手裁さらさ

あふきさし

かいやこう蚊
をかりてささ
ゆうけむまる
をだーして
くださいよ

一のいおのよふきりに
せんさいおうくと
かねるがあおさるお
ちんのうんざるお
にーやアそんでを
とべどうで
ふくにうくーくれ
べいろうがみされ
せんざいおうくそ
いふりかアをくて
ぬはんのおくてふ
そのうんざ

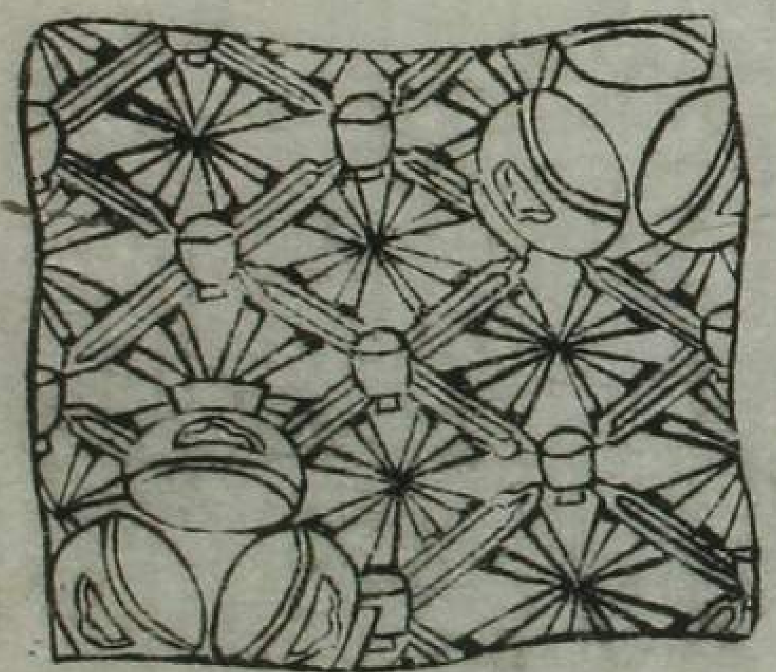
志まい反臭



はまへ袖
をどうぞ
おくりなさ
ーいかし
たいか百匁
とはなす
とうろく
おくろう
えアさる衣
が出て
みしらハ
よそちの袖
をうり
ふれ

ふうのい〜

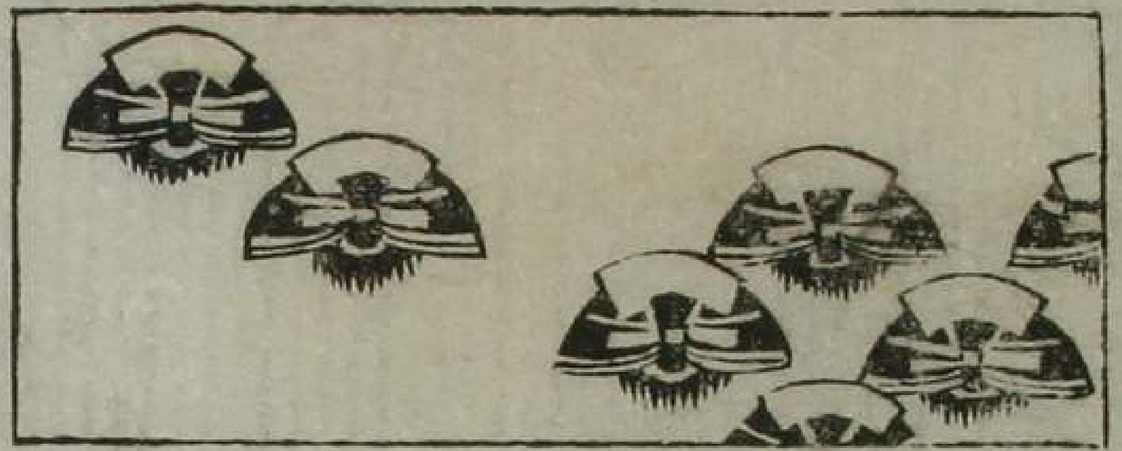
きり かが 絲



おそさん此もん
でおいてくのとり
なーにかぎ衣ア
よくおくがきさ
とうかとそう
うき、あーしり
ちうにきる
我をひれ志をひと
はーねおうの衣
ひとしそ志りて
うりてまもの

たまにみ志ま
とてべうよう
つきおうサア
おそーする

むすめかうし



一名娘まき海
ゑゝゑゝこゑゝ
しとりふ見え
う縁
おそろしいねぶ
うきうきこちら
むらさやんせ
あんじやつく
ナア

おそさんかうし

とうろうかうし

おそさんのかうしろうつきさ
まかふれあいめのハうらい
とうろうみけいろく
まくひろうろうこうと
おゆてのあいされそく
くちがちやで見えどもこく
こうにおそそてんあるのす

そくびらうふもろい
さ攵のよやネうる
うおがうちくしおゆうさ
ハいらいめのうまれ
多くのちい今ぞア
女の内のもみく生
れこ附ふハねを
ふらいでもそんそく
のまいときけぞ
うもこといい
よ子十一さ

けんうでさしき

てれ年うんせ女日でら
おまろれの附きてつても白
のどうくれ中きらそとがおそ
つておそろーく年ら名つ
まうたりんうのかうさいお
きとのぎんすうけまほうろ
日よりがらくわあさ川
てく
女いるまえーそら
まげさいろくぞるを
やまくそをおびにそそろどの
闇雲帯似路次
うらをまくり
内廻
てなきいころまにそきまま
手拭衣似邪六
きろきにかる
肩掛
こけのろまきたるうかことさむそうに
ふきぬきなるれでもあびよせぬる

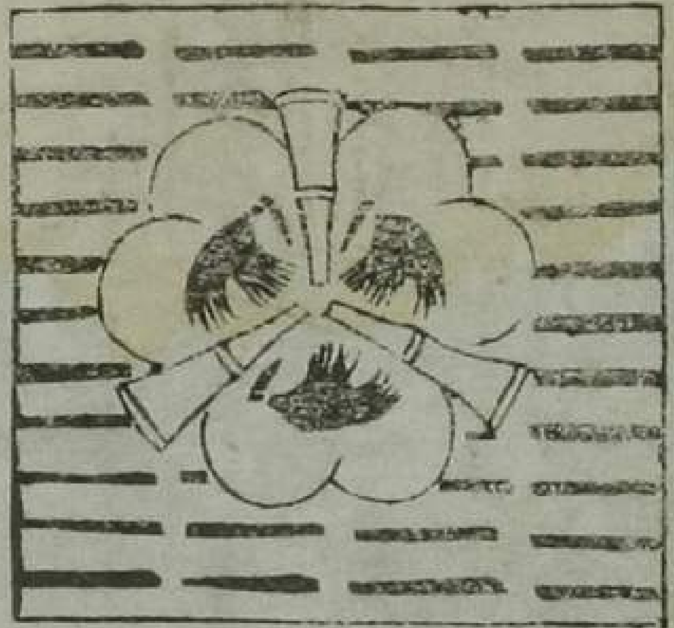
まくんかうし

まくんぞたくーの山まいまで
まろむきやくえるう紙急
やかそのまをむろうしくい
久まずーくーしててんある
かうそうをきり川くすそ
の内れあまてえるくぐ
きてでも二条おーしぞ
おゆふ長大門の切手を
めりてゆけ氣のさき
うね京をうろうんね
じやアいんせえし

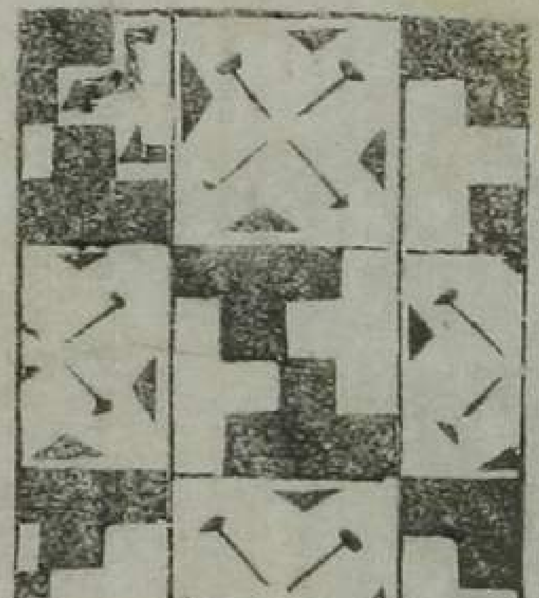
とらやの曰ク
関東べいれる手火の
きれんぢやのやうく
であるまゝうちで
ぢやりのぞでや
ないしや
ねたがさ着て
きんすけのある子
をぬうたやいれ
ぢりんおうえ
でなをとがせる
ぞといふそやイ
そんざいる人の
あさまのう家
ぢやうとといふで
アイ認へその

おらが流よ美と
とちくの流美と
むかうの流し美く
うえ下の流美
とと今せうきなり

けんか片ぞく



与二郎小もん



かんのその云ッとせんえりんやゝ
がはどめかんかいてきその組と
おやまうせう東の一の字小
もんかいらかちりとのて
とんでぶうてさかきまり
さとあの〳〵のおさゝのちやうと
小もんもつまうやかんざ

筏形そでう

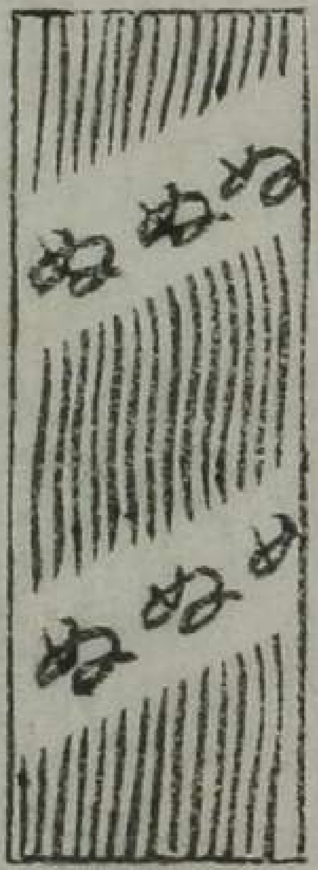
そて川ぢあいぜれまつろ
てあら屋やまさらの時
に新がきら介エ

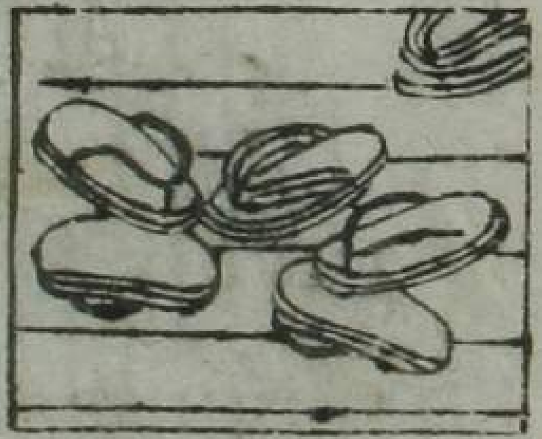
あし足小もん

すれし小もん一名
大こつらんすのうらの
くときことなきてうどく
をさくのうちきぎ
とも中きたらいて
おのかろむつく
うあいすのたびぢ
めうりしちいらん
の在中けい其のまゝ
ねやがむくちから
ちうとあいけちう
いきそぞさきさかで
まらそつけろしんき
目のあけおしもす

らうの模様

ぬし小もん





いろは仲の丁で手川だしみた
ぬしふかうみ
もみくさ子
かるね

いろきみしたあひく
あいあらんで
こんやのつてうけ
くひらぎにあがら
まちつよく出居て
てきりさがすあ
むかやさい仕てる
女らにうけうを
やけこかんにん
あされ下さうべ
くんおやだうさ
つゆきこうて如く
かられてハ此の
さううにつるまく
やといくだむすく

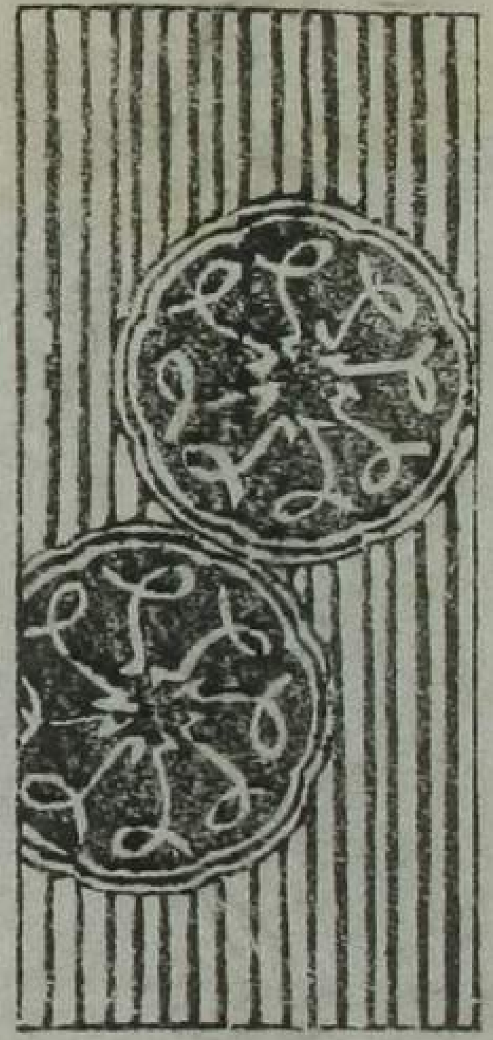
十七
此ハおくへ入おしてし

[illegible]

こうもんハツをかみの下の文字入ち
けのしやへちてちん
くのさくもあふきくの
さくのいけさへまさ氣
しくれろうくく
うきのやくめうて

ふとんかご

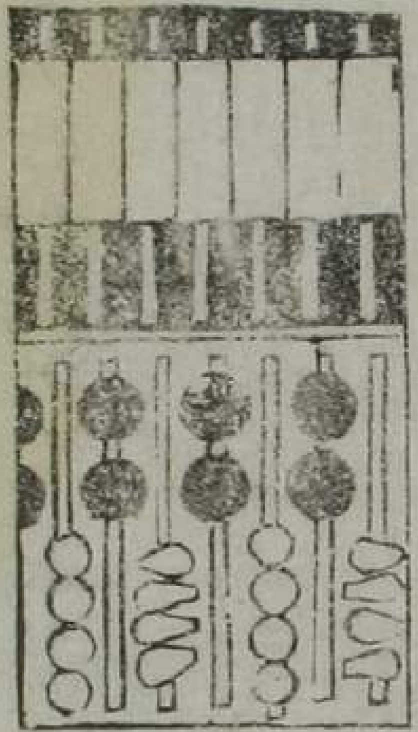
[illegible]



一名よぶく
ちめん注文
のくゝゝすると
喜ろの
ぶとんきち

さとふのひともかしこき
てんきこのおやとくりて
おりたゝまんさうも
あいぶ郎にわけさまれ
おせいかうのおさ
たをれ酒の吞たをれ
酒屋の吞をたちをま
うりのくきよきうちは
あんまりげんきんな
るもさすれとてそ
をたつとも云

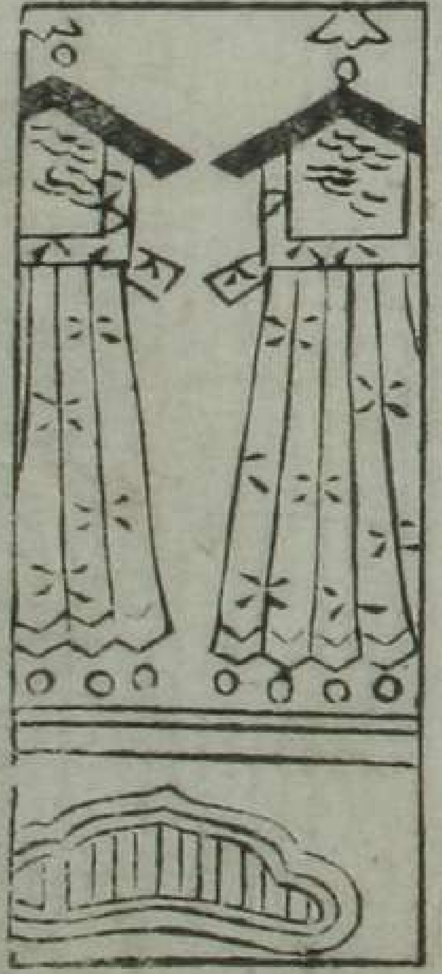
[illegible]



忠盛ハ祇園の雨夜に情をたきとめし功に
より又もとの殿を領のいもがへやにの
ちとにかりにかくたゞさりそでや
ませよの御剣きさよありけるおちけず
むしていとてんぐくの火の母きん一すん法
も味噌をつきからしれりこゝかりんる字
の大てきとほろぶしい思をおてし火をおてし
さとげのむすびの志やきをかきぬる

[illegible]

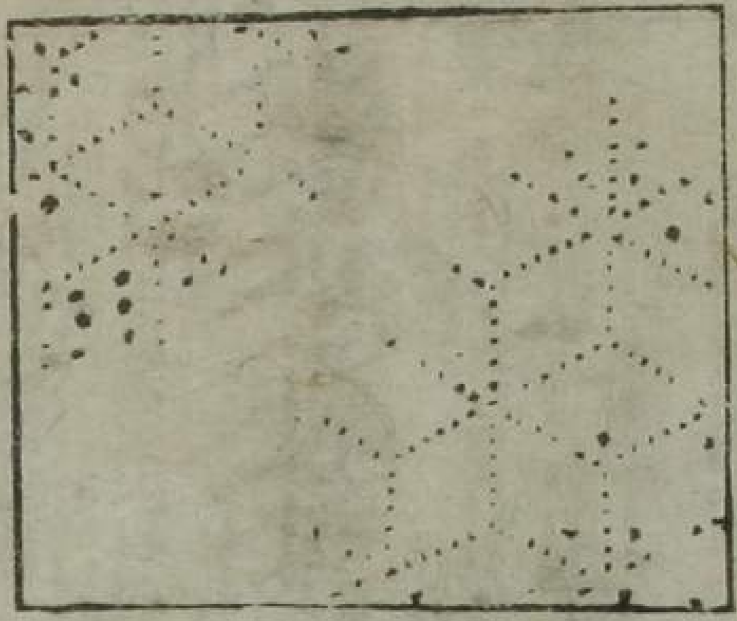
下まぞるとのふるさい人のかしらい
くさありあらしちいさ子くら
のあいしやいしやおきてのおかけ
て秘をとろんをそそくてろし
なりたとのへいやっそしが
ぜんそをのんでいしねさかりけれ
はよていたをりしねとこゝい
いきろと大すりかつを



[illegible]

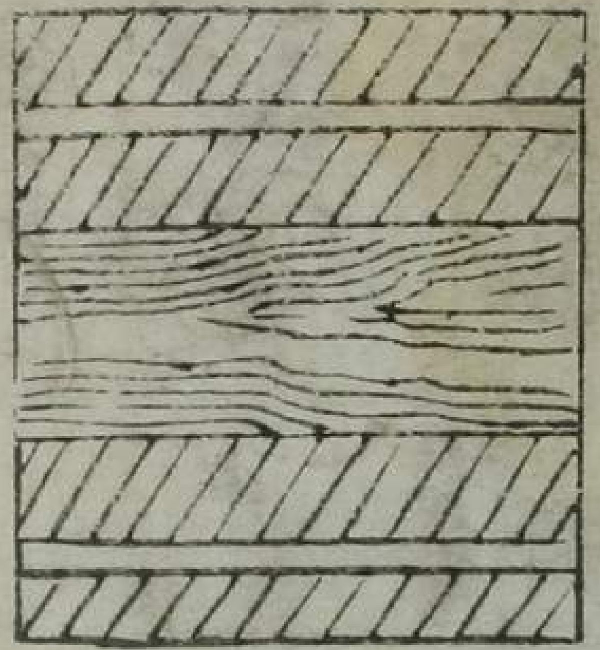
てゝそのうい
白むくをとらい代みなおそぶさ
つてト手まちそとのい不出叉ころしして
くまをかするえそちら
みろちまわそふ姿をとくら夏病の氣は
たみしあろえのかみをとるきするる

小あられ



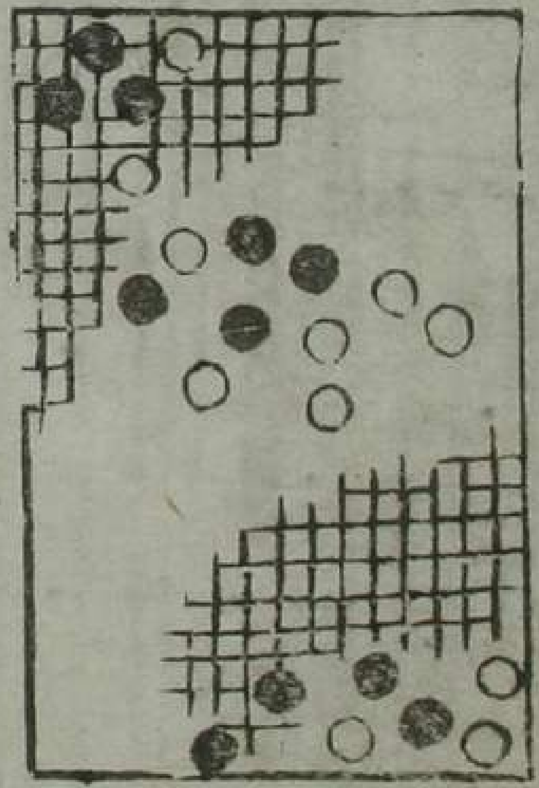
今いひきれあし下よごおやたられるくべてかはあまそてそれハめづらしいできちりくだらわらあひてわろやしてあやまざ

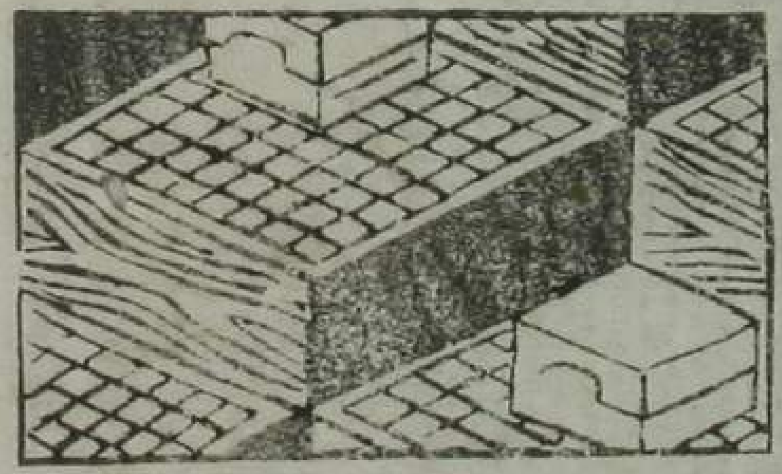
又たつ子ぎ



こひろでふりつけられてふたまらぬ

ごばん おもて

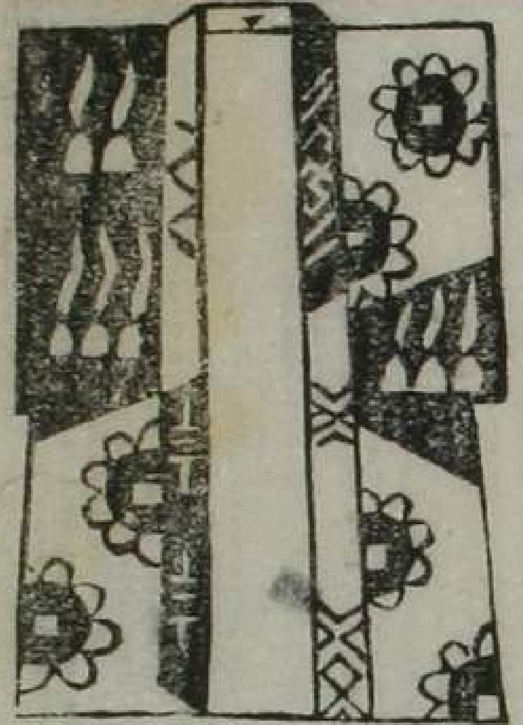




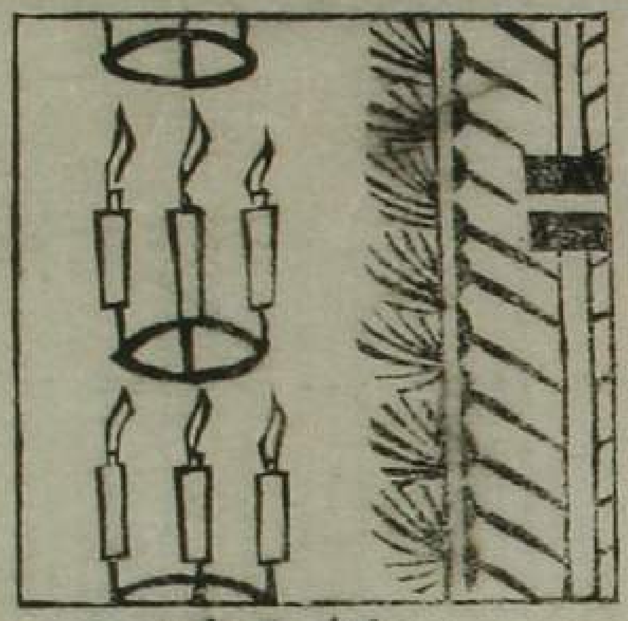
ちぎじま

あさぎさへ一下よ二ほとら一昼であそびてみれくとどはきんくけいおのといこゑ子がんを出してかぞあそをしてくまいわ

袖もなき羽おり



年の暮まいり

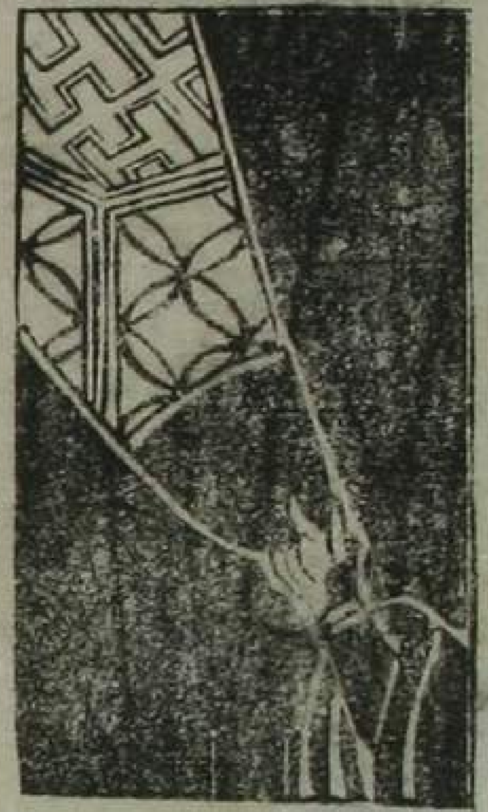


田まつかへし

上戸ハ松たけ始又袖中もおりのそでそでといふげの衣ヤ室の二つありと一くるとひとたちの大袖をりざ袖もあきまよあしいはつきてあの人とてきれこのあるしもくさざそのきまくまあつめてこじきあるてくも年しそのうさのおすぎさにつかよ次第とあしつ又せにうちまつやきめつるくしてまきまきくのうちちら称

梗らまつちをさし男をて客人にあいど〻出く〻とやハ主子へ年のとき手まのうまけといふ友ちむまのときまいりあしあいやうさる〻どたら年のとききまのあれぐんざきようぞろ〱そしてぐんぶきてそろううのきいとるいでれあいそうしことのへぞ女がまやそろそ縁しまそて

どろ坊づくし



たくはつしき

ちまくりくし

さあろくにくらし　のどろぼハりごんちあらぬ
ぬすみのとらんちも甘まゝ人の内をうる金の有
きまちしまてぬすむところをさかひをぞくう
とりかへしもかへしけ手下出ておやうさ
くひりときさをつけられてえらんだんハ
うれきり

夜風にわらかぬたるにつゝおとび
こけのふのいらのあうぞうのしよ
しててちうつてよくさのゆくでたま
されてはも分もあるやらく中
女にまさの家んもきれあのやつて
をおけるをと内でおもれ
引きれてもうらみしきく
おちるまするる

出寺かゝし

小僧言野ゝころんやの
きくろくひにてかゝや
ちるへ行からやの右ひ
こてぶおうぶ下さり
ませといふう後出
出れのふひをあつて
いふのなのんよもる
とらんで小僧十二ぜう
ドのすかしやまで
おゝまきつぎき
まきと

おしくわく

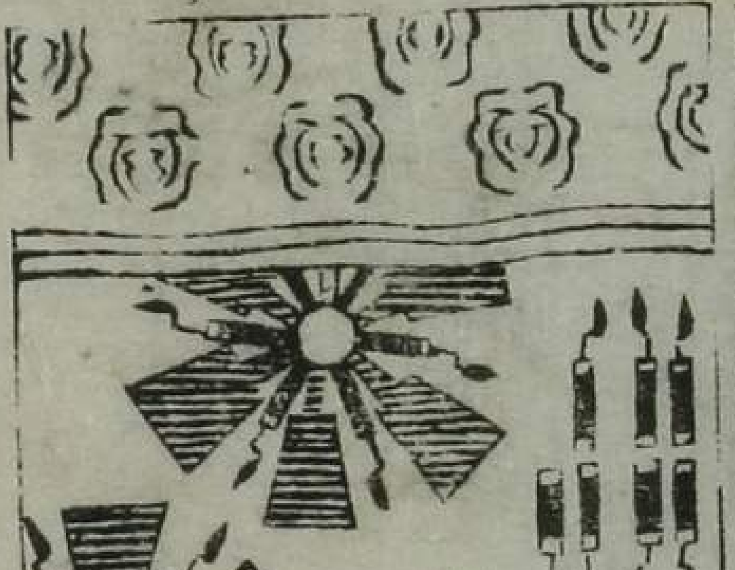
象一法眼そーの手とをはな
しあくさの切あり
みなさんぶらい際
ふ名前の
よろしくねと
にほそ
よし

仕立
せちひおうく
おそうたち

作りかしこ

されたえさんせ石ら ひつかくうとでざく おしやれちきるの たらくさ川 されさアしとうもアア みけてをさきベア ぬのす

かべ女弁



しんかうさ

天ふに寄しだにそる ひらくの耳ハかべにて 耳から かけておそふし ぬるりんだせく ぬーぐびんきうり やさかんぶうしと

文

うなぎのかの

さ神んきようゝうき上あれべ てるひ取しの書いをる ますだこ上そう へさちな よろうのちやめしにあやさ を見さらおそろしくと まうらさ

おとうさんもちろ

ツサおくいさび

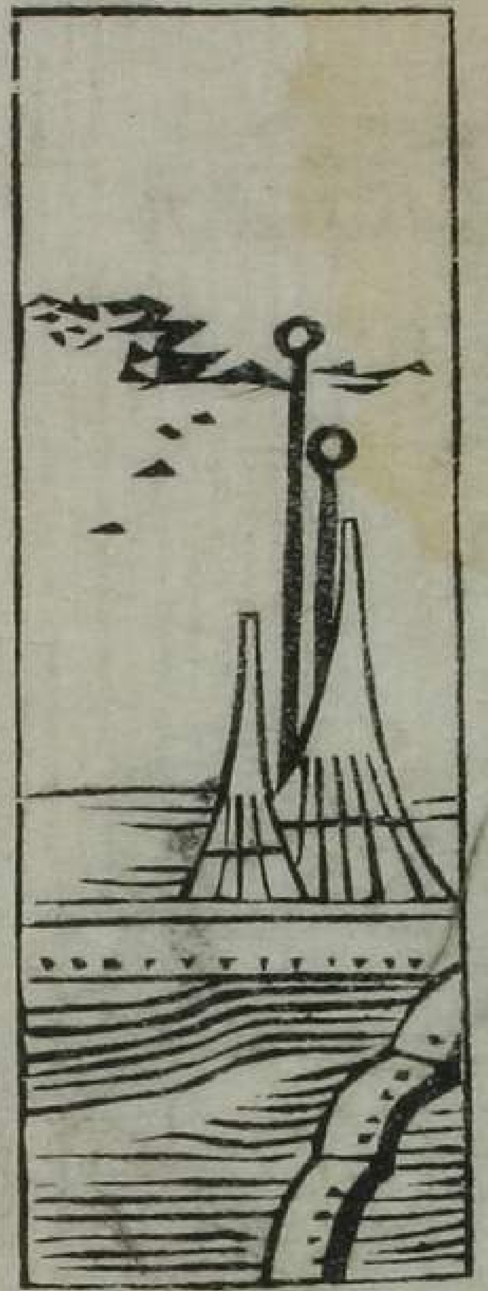
ぬーらきあのふあん八 うけたツサ ろつてもてツサ うめちあつておけツサ

けひしやぞちやろうのきれゐり 光も中ふの徒により海のこの喜人らへいてん でうまいくとおめられてをあたらお ようくよろりがまずかろく

つる風こもんふろ

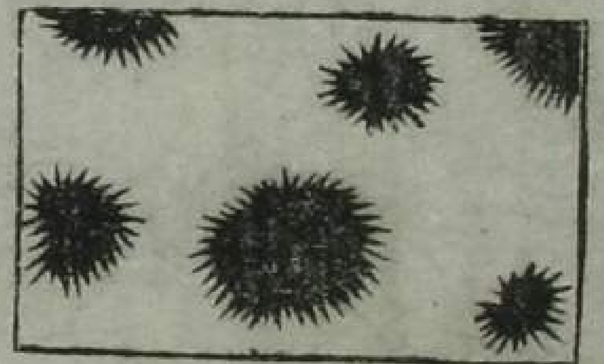
くろぞめろてよハよ丁わの女もハきもさいそ中ゞよもきいているくそ れきいていると手がおゝ手にあるこくしらずところでんとるくいきやしことらいされを出でもいきそさゝらゆハナてねかねさきへたくつりとくの中くりてもくる

あかしのけい



時ふたとつへバおうの女郎そのおくとやふの けいちにハよくきくそうじ致てそぐむちぐとつ にきくろえくあいが底ぐりにハきつえりきちあひ

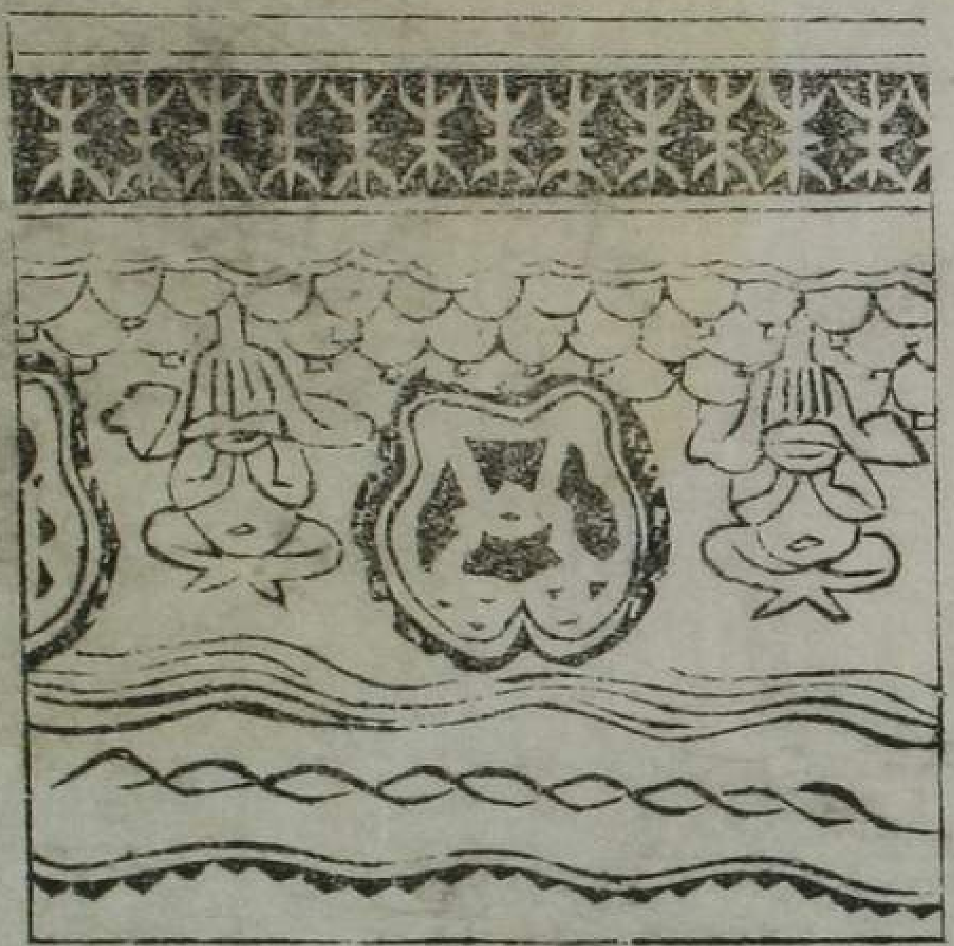
うにぶり



うにぶりハそのつぶしの志きせまハよくに出ふるく

羽子がもつて浪いが海にあけさうきくおくきえごろふどまやしもけらのまもとつやまあやくまくの孫

ふさしもよう

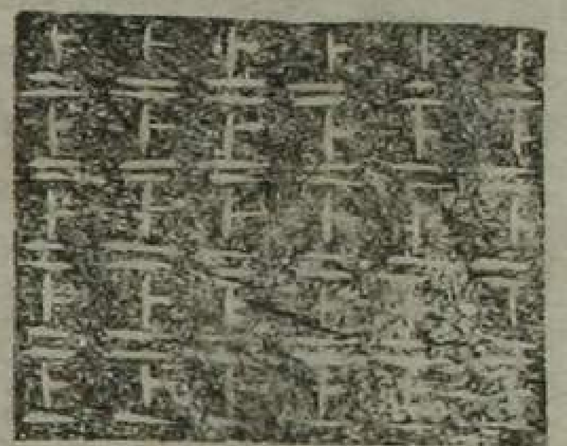


あん町よのもなること申ら乃申こもやすくしあんさんの子おすしなら気れおきもておくまいうぶに合てまもんうつりおくそし

ありさしもよう

そちらハさまんのからになてよし

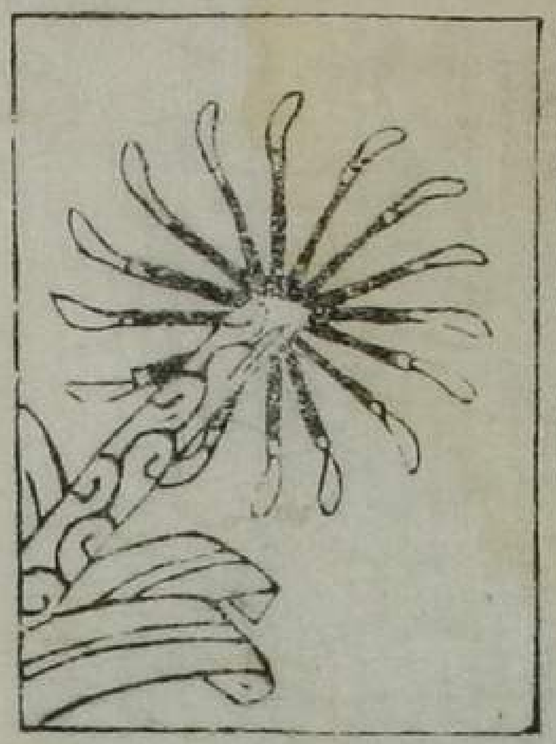
日本六十余州やさうらばのらこさんていつも口てもん部すび申きやうのおひらそたちそちまそうよ　とんさこそ



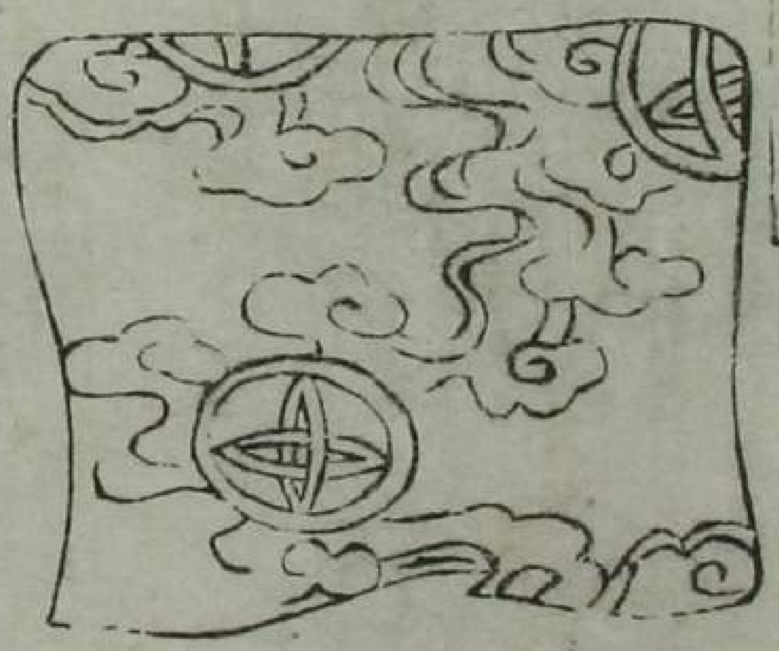
上下小もん

上の一の字をとりのけ
まん下ろ字さの
一の字をとり申れ
ハあがらぬゆへおもふさ
うへのそこをを
とらへのふもんの
つくしもよくいろ
又きもんのへたなそ
すきこうのきでき
やんの こまり

いちやうまげづくし



天文づくし



それハそら
気もやうし
されそは

こうそさこりふんよくまするハくおもしろし
そくまうら内のまうくうくなうとなく
ふりさうのゝんなうるとハちうふら
あゆかのこぶしよろふにあてみの子の
おやりやてうくしくひきいゝ峠のあ
んぶいやうなくし方すへねとめつてや
きものてそまり き やらあとなふて帰
のこうりを出しゝれ りうふいし ます
りしやりくくくくうけて上てこまうたい

けしき本

当代のはやりひもの
わたくしのうころに
つぶりきん正平の
日ぐげこそんなきさふ
さんの絹つきるすぐに
あみそんなでいで
おひいてあるとさ
そこ引や古本の本場の
ありよのハなる紙はゆう
あるものふけくりる

むかしやの書ぎ

これハ貴きてけの此せうぶくの切のあり
のもん方名おもうい司の事しくてこ衣
そろ分をもるふれらいちれやまとれ日こ
すりきられるこしかいろんのでらく
ちゃうとさうりてもきれすわ寺以に
えつけてぐくやのあるきさとうぶ
うにあてしえさしよ
としをへいつくのこされの
ものくさて

文字ハ言のはらかおてりとんざやそのえ
くれ下女のさくさけしすみをのへて
つけ本へかさけしやうりきら筆せいれ
そずのときるいふうくきのおれむせう
よちおつけたしきつけきりらこかうで
さりそうきうみいめんくだ〳〵おいこんでと
たしハむ母のらきさらくるんちるべし
うしまつさのうそでず申らしさき

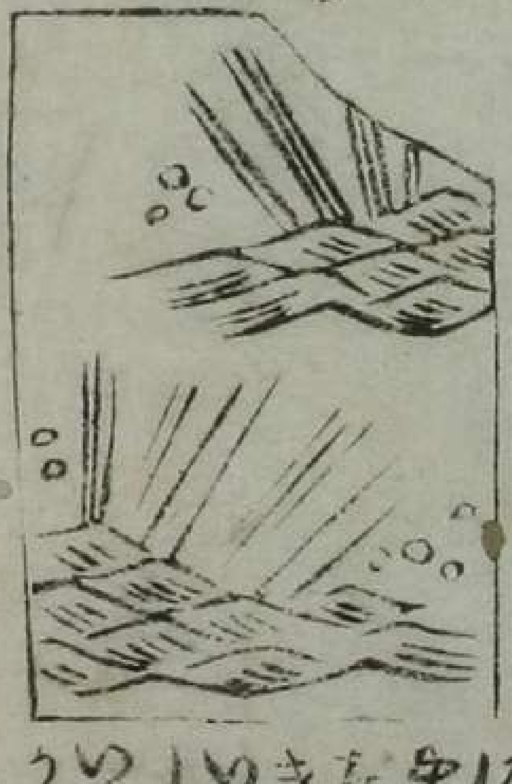
さとつけしぼり

ぶきさうよきろぜにあくへ
ほさしたみくくらがむつ
くあしらむづくらしさ
がむづくまろとおあくぐ
たろ〳〵そそやぐ

猫あしこうし

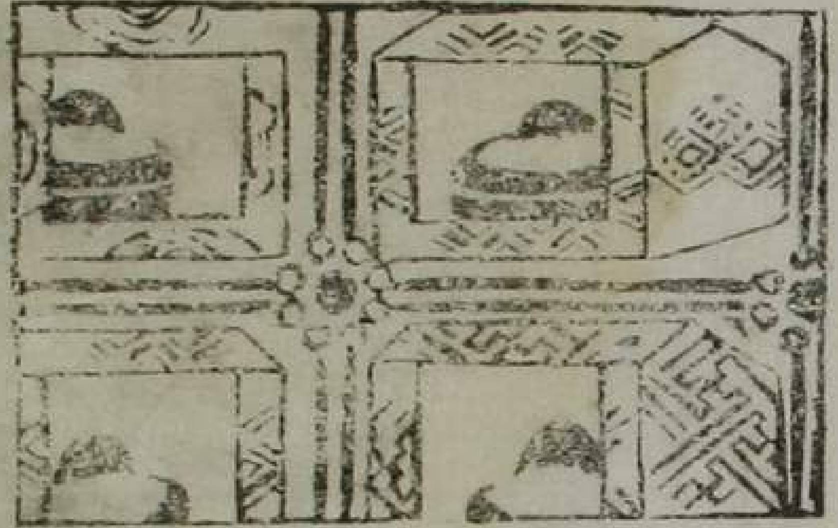
あくのこのこ子のあくやこのこ
ねこ〳〵んねこ〳〵とんとねこの
うにそてさてねこともねこくず
とこうられつねこみをうこくてのら
ねこえけれくらこのうてうらてえつ
がしどろあらねこのあくまうへ
おやこ太郎さんのぞらあうり
ろんはひろう二三朱
さんがさやさく

ありかたの図



係あと十りんも
まりうのへらの
たうしのらにう
きくさへきなを
いふりくらあん
ド気りやうく
いろハ気らみちや
えーしくさくらい
あふにみなてらへる

森炭の節



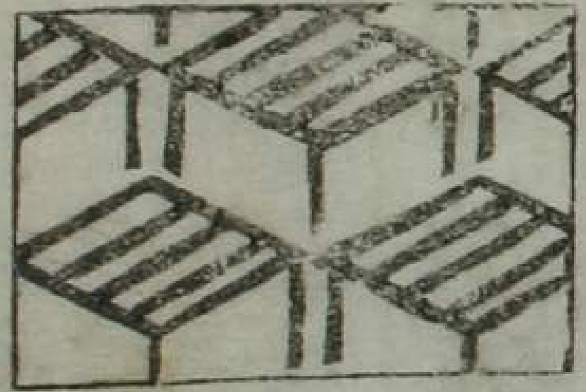
ひろうれふしん気を至てにぞめ
出ぞ手きちしまちらなかこ
たくらいろ人ハうをまでとき
ごの一白をのそしける
辻ぶんハいつくおやぢの
きてでござゐ

かゝる炎生す
むき〳〵よす
おこうしれ
たゝ火いけ
の皆中に
も割書
実意ハ宗
のあふら
そいつらう
そうれら火
のめしきの

めくらじま

古風の円紋りんごやの円紋つえんで
のらもようなり
かけ法さる家ぶつらくのら
ちうや八熊七三ゑで汝も
あしせふのあいハくびのを
いろハあらし女郎ぞ
やぶつまうしてとぜちに
んといさめ日のあをくり
ぬきさかぬ入石あつてに
うり針そのうへをそり
て日向から〳〵のかぶに
そなるめのおらまいぶら
ぞうとかけさまて八て
ろ〳〵いけてもらあこと
かうる時ハアしめく〳〵
かうそ [illegible]

ごろくつみき



かくのごとくに
古渡り

やのはしさなべのめん
がさなり
ありにつるやとんきとん
みされとそんいやく
すこそめの袖
ろうやりむくたんす
へうきしーが
きみのほと江戸
とでおんとすく

やとすゞみ

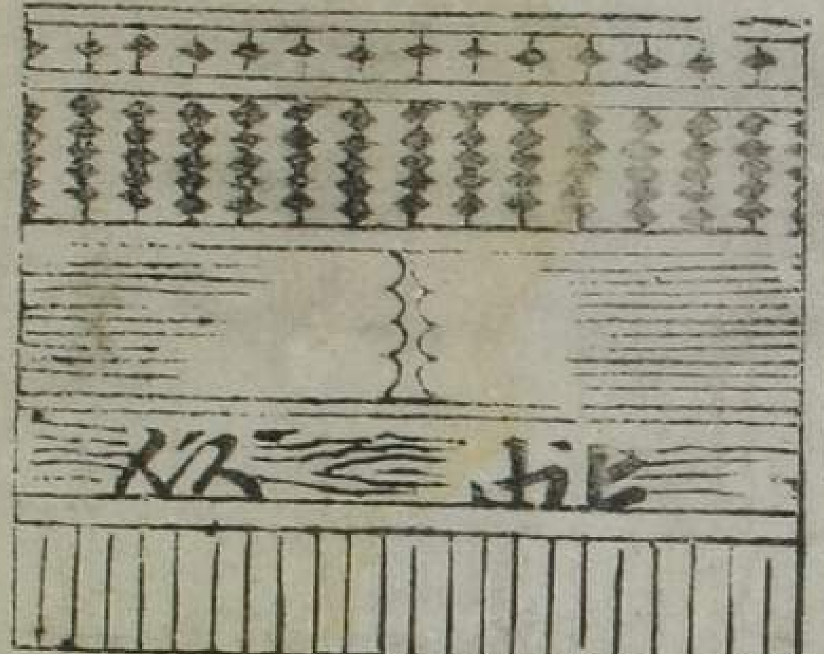
ろうづきさら柄

おさでむでさいなづきさよ
のんでむしの袜かきれるか
大きまでみおういるうつきをを
のんだら壽一命の福がき
れようふ

ころおゆき

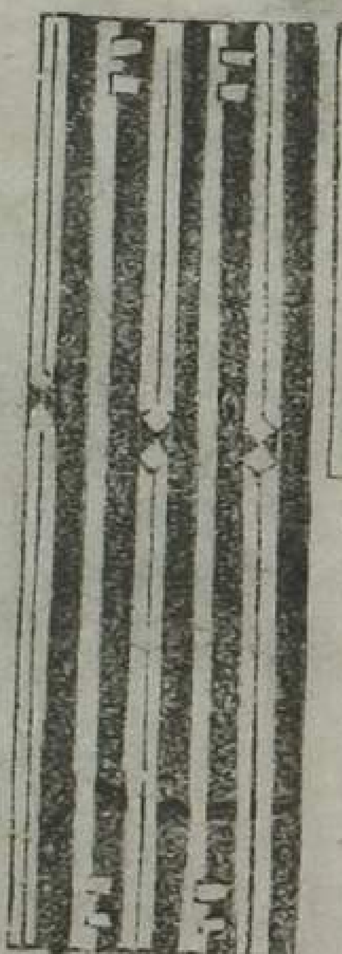
むかしに壽れさ
うきのおこのもんを
おかまうけてもなね
にいろずてきうら
るてく元りのそ
たのんでかしせま
しさおうんとゆう
もくるしゆれぞ
ね

商人かゞく



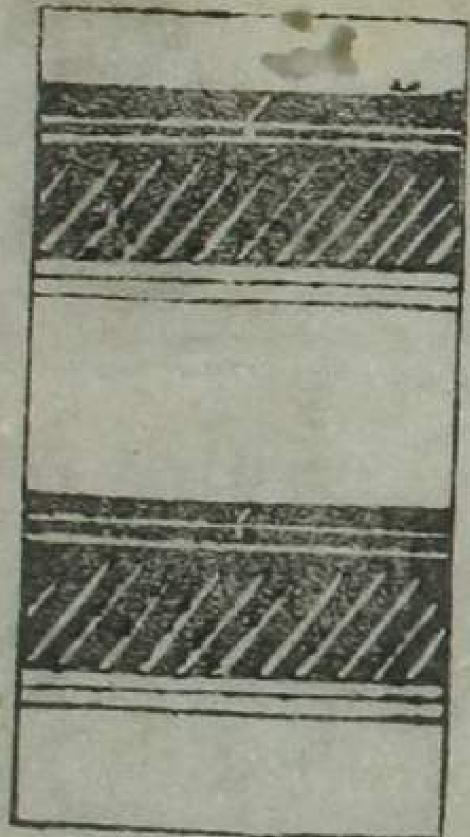
商人ハゑりくおもても四文銭
をこみ文はくにうおんが小
かれんをこ志うそうかうのふ
さまにれなかうすいとつく
だ一人りの事がわれも
二朱銀を一分にくるが
うけ小なふりすゝ

天保おもし紅



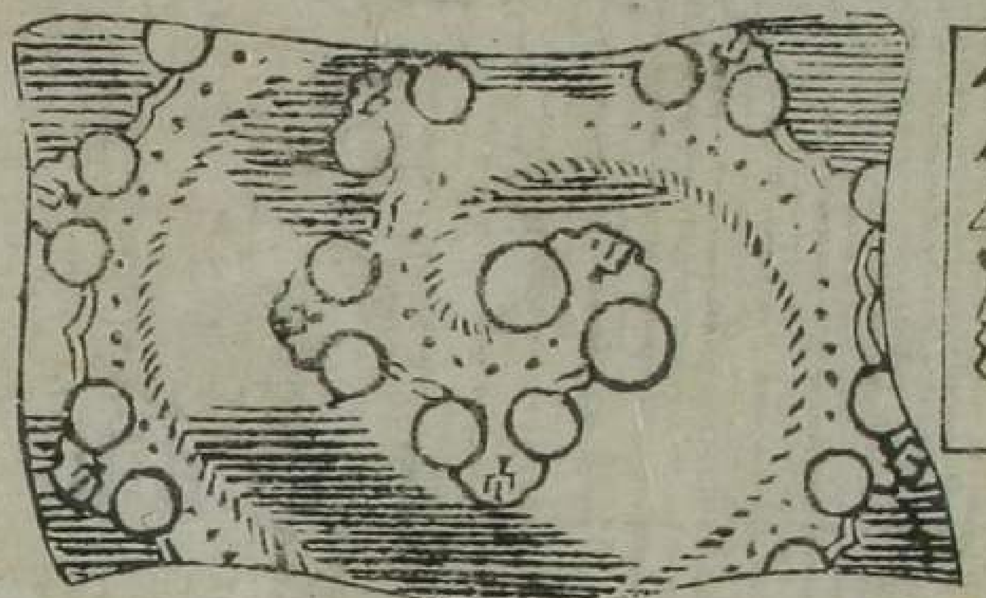
一宮まさしかていたつてかゞぶ丈夫でおみえます
さくおくでききりがるくてなおすく
だくろうりのかせまする

成長家のもく



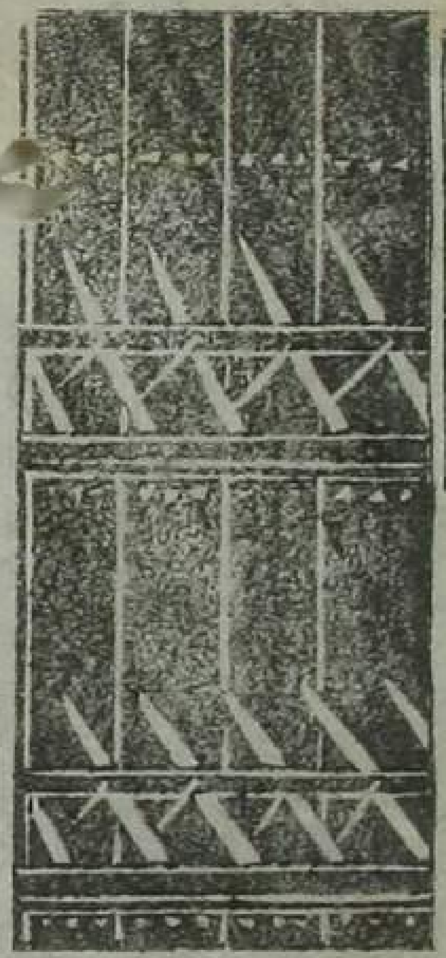
もやうとなんっを
こてやにてちられ
てるむっさ一ゑん
のおかだしとにいへ
むとうのおもしろくゑれ
一けんのはかしうこと
いゑんうくちっくのア
二ろに九尺のはうだ
なよ

ろうそく



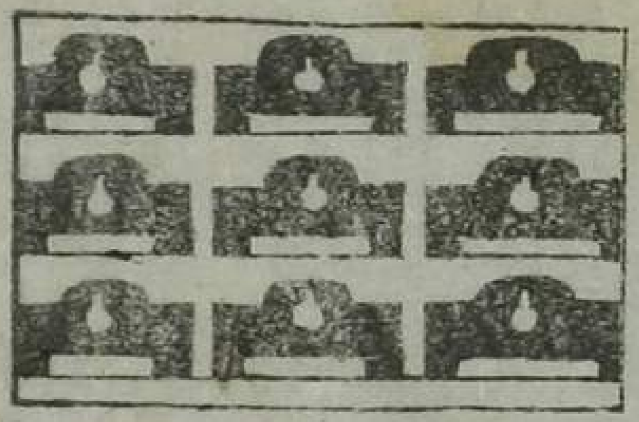
略紋の定目を以
あく出来るそうれど
こ紋のあるはまい
きらくとんさうさし

ゑのひえくし



一筆之しれつこし私
つくえしまとりやつ
さ
ゑのひえしハそふて
ありまのとり出
ちやんとゑ出いる
のてまいをめ出
たし〳〵

ちやくふせん



ごやのこ
まいしま
ろくとみ
とつてかう
とゑやう
おねるて
するごゑう
がく

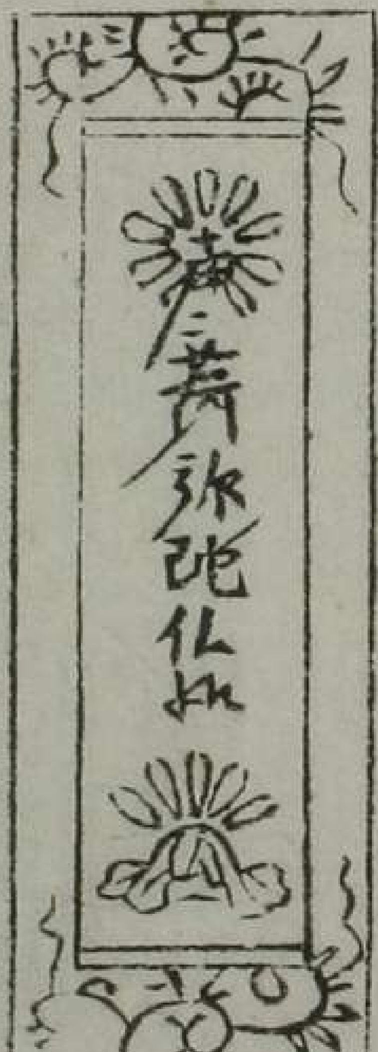
ゑくめくみ

こともあ、
ちう、
ちるれぬ
行やさう

ゑうもんのけい

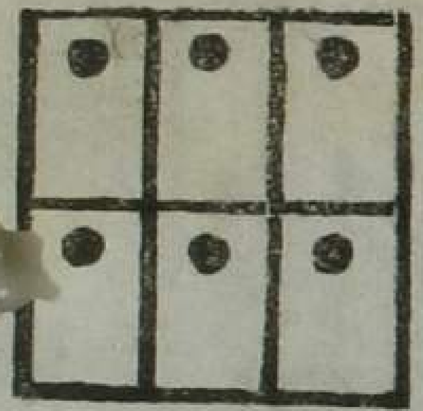
てらのもんまうとこうきれ
これ志あり〳〵じ思う
ろうい志くとゞきうあけ
てらけどもいつやじや
とのめしてます
かん〳〵こツうち毎を
のうんがさくくちなり
ふきさよ、まりおそ

ごろすくのまんぢう



ねんぶつのまへたのう但ハあらひの会
ありかおる上人
十ねんぶつをも
ふ入九あんけ
てねんぶつ
くるそのもちあ
そうのうちにて
口十念ちやをつとめるうちのもち
のとのく一の内さこれハ一ツのまけ
ねんぶつくこれをまけおきなうれの
名号ととつけこぜうねらひの人
おうらつけしハおんまうぎりる
人のまんぢうするべし

やくめのまんぢう

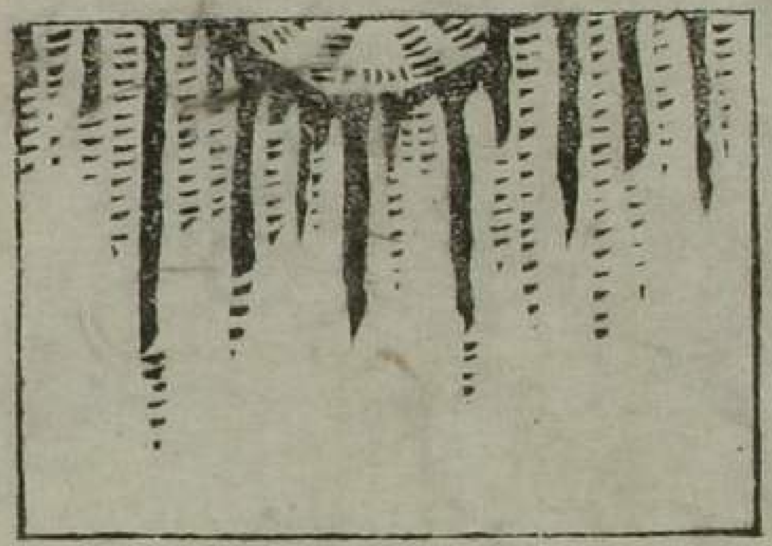


こしやられつあるゝうつある女子のもち
ぞくをこうびきくのもとけハ今性の世中う
とうくひとつくしといういうくれやんしゆくを
おてられまし〳〵今のあとけいるる
るろいてさうきちうるよ石組廿

九ぞよふしき

八重つくさ
ふる九重や
きくしき

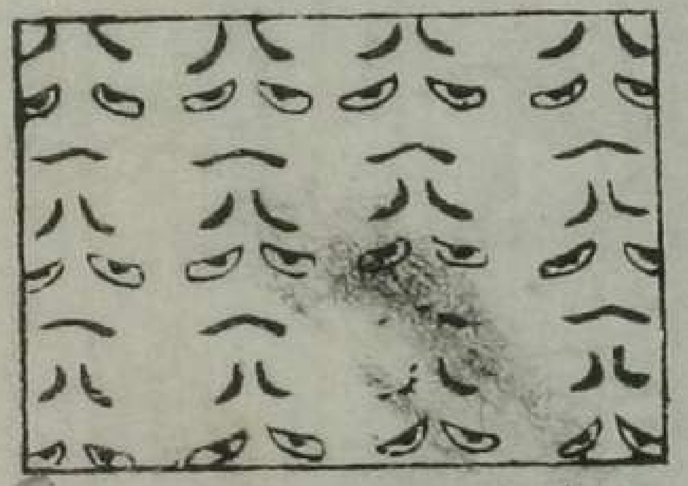
門臣



おせあまおり

ちやハおせころにあて
うをきかおけさやし
今頃衣るまでをを
むすめいのうを洗
ゆふうにむしぼま
つかいすてきらうきう
小してさうそうつ也
らねしありあり

かんしやのはと



うねやうし

おう子ちの紋ハ国手席中
の字のありさう出るかハしや
こすしなり
あるいはすのいろおいて江戸
八つ本けんつまいとこうで
うぶうとりふるやさと字をだ
流江戸でうんきくとりを
そいおうやおくぐ匠の
うるまうてできるて

おぢさんのなかをみるとのふ
かうみさ派ういう八ぐ
字をもちの八八の六十に文
目いうわいのそちの字百の
くらうよう川をなけ張
にいのへちまのへの字をそ
さにうい川てのふともを
くらきう川でもなるちさ
さもおもしろ

染色之部 并序

抑染色の始りハ中華[illegible]庖犧氏作て天より見
て空の色[illegible]わかちはじめしと神代乃
二柱男神ハ[illegible]女神ハ[illegible]にて
せんとあかしことの[illegible]武蔵の國乃神田紺屋町
小海のかされは白布をあらひのくハ[illegible]此布
ざらりとおちひく百文ならびのその色を[illegible]しより
此小海を藍染川と名付所の名を紺屋町と名
付ましよりて後武蔵野八百里の内にて
八百八丁と定めおきし其塵ハ八百持てあまり
されハ[illegible]より後世の今に至りて千種万色を染

[illegible]いふとも紫漢染の字をいへるハ外にも
同じものとり合すべき[illegible]の春夏秋冬の
此ハ染色の形を表し[illegible]出し
染に[illegible]一番[illegible]天の色ハ[illegible]
色のあつさ七[illegible]まで[illegible]
いろは[illegible]染の本店本部 藤の町の染家[illegible]
蝶花形の模様中に題す

空色 一天色

此色ハ[illegible]色の初り[illegible]庖犧氏の
[illegible]三百六十五度四分度
の[illegible]染て[illegible]後義和[illegible]絵切着に[illegible]

り海松まぜりて藤子六郎守敬なとも上ノ色を出せしは
されどもまだ色を調ふ麼の上を蟻の行かず習ひありて考さき
ことにてありし事なり那ハ渡り出ハ　推古天皇十年百
濟より僧觀勒と申人和國へ渡り文にあれハ是より
色調かた段染の事ハ本に記したれ所ハ中段に染ハ
紺やに此段の段ハ目にかなひて染ハありなの段々染
にかなへ十二度今七おそり小紺ハはされハ古しより
の子ある間、よろ色目ハ十二七ッとうおひ出ハ人の染

藍媚茶　一名海松茶

此色古しよりあると出もの守古まきより深如く見
より所の外流行りし當時の今に至りても此女

此色方盛んなる海松色にて極上の致のある
色にて十人に十人好みし此頃いきの色にて此頃ハ

藍海松茶　一に觀觀茶

此色神祠今流行り染出しハ色にて貴人あるの
此方官服ま少々黒さしは色にて古代ハ濃き染
と申ト三位ハ濃さ是は上傳ハ天中天庭司
空中正の此方の御所中傳ハ保壽官此
根年上洞堂金蓮中蓮鑑察宗像採聽官あとの
の方く此色ハ下傳ハ準頭萬壽延尉人の
大海藻池容審辯官出納官あとの方く此
百家されは此色ちやと見てかの色なしなとゝ足

より出羅の色いたるの縁まで伝へ候ハ此色ちく
ハ地より小様に相まわり申へ中ニ而ありし荷郷ニ而
おし茶の色ニ而御座候

桐傳茶

此色一子相傳の色ニ而御座候而者相傳家と申ニ而先
祖より代々傳受いたし深秘ニ候と代々の傳来の色を
おゐまり實の色ニ而ござ候ハ此穴地合色合まで色も
見分しく相傳のちくハ今の地合ハ相傳ニ而
随ふべく祖の先法を守り地形のわれ相傳
深く一派をもつてあらんかぎり御座候

剱法　一奉法一纏法一張法

外法ハ御家中御用方御初年より相続て[illegible]
出来候てから急ぎ候ても深秘いたし候へども相家
申てハ[illegible]ても急ぎ色ニ而御座候ハ相まより[illegible]より
あつかひ此ハ[illegible]其の元と[illegible]桃色の[illegible]別
しきこし合ハ[illegible]申[illegible]ニ而[illegible]掛けて[illegible]
識のうちも識て[illegible]の[illegible]のよふに[illegible]
此法ハ[illegible]ニ而[illegible]法ハ[illegible]
其の法ハ理ハ[illegible]ニ而深[illegible]人[illegible]
[illegible]
其法ハ合[illegible]女　[illegible]三和[illegible]中[illegible]
深ニ[illegible]

好む独帝はさらく深のよふ知らして宮中に伽の風あり
量りあくむしも所く机に及さね根に深のかく宮くなりて
継志ハ憂思ふて度心窮敷鬱塞より深出しぬ色あそ
らふりぬるかへ是る方色出て此自ら隨ふて心緒のいよ深くなる
出そも亦大合に知りけ此深きより萬蒲遠志未かん部と
もひ深くなりぬ

絃深ハ服自絃の絃出て文寺大の内絃は図幕の色あて
此度ハ殊よ歡図幕とも絃図幕ともいは絃下の大角深角突
丸き物色もくさ角くの形の紋を射るは服図幕白図幕
出出するハ鉄図幕の此本紋も出来るは定りの席出て定
白出図幕の此方に仕合鉄図幕の此本深き極り出て深の

機織の三のは　宝り鶴

鶴の義ハ深色の三のふ新しも出でふ子未だ多く合方にて
機を此織く知らる色出て深くよらせ此鶴の織机
の義もおかしや下宝ハ宝易の宝出て一より二を生
二より三を生し三より八を生し細めて三本の布
の鶴とあり是は一を大極鶴とし二を両儀鶴とし四を
は又鶴ハ八を八卦鶴と陰く不織のは八卦鶴とよ新りては
卦の外なれも乾兌離震巽坎艮坤天沢火雷風水山地とす八の卦性を
材す八雲不織しすは中古来深くあり此の子極る如くき
織方出出て世乃のもく流も絃で東へ本る上で云ふ

中にも七十八度に織ければ〔判読不能〕

松葉色

此色昔播州高砂の浦に尾上の〔判読不能〕

〔判読不能〕

跋

京の織女に洛陽の〔判読不能〕

東都の〔判読不能〕大坂も

難波ぶりもあそび江戸の〔判読不能〕

色にかく〔判読不能〕人にあらば

よし〔判読不能〕所なき〔判読不能〕の目

遠き〔判読不能〕

あやめて香の気条乃白むく紋に
衫紋嶋ありめし乃めし縫
娘まちかねし和しく縁紋
なさせ紬の紫乃下世帯子の
袖の寒さ作つ清んとがまえも
可ん哉織成の沿派なりまえ
うかめく出で妓女乃艶なき

鄰纏こそ川く落毛紙よ数
康店乃縮てんなり縁縦
あり川らのよ女紙以みく嫁く縦
知通乃墨国なりまえ剥なら
とまりこの縦強給の縮緬状など
衝怨ずし縦紙紬まで紙
さ紫表紙なりまえ地紙なり

東風ふけば鳥もくらくらり
ちゝの亀もよも一枝明まよ
此国のふところも三ズおくり
[illegible]く迎めでたき[illegible]
[illegible]寿福禄[illegible]

[illegible]

いらゝ左馬場

陰陽師

同五郎左衛門